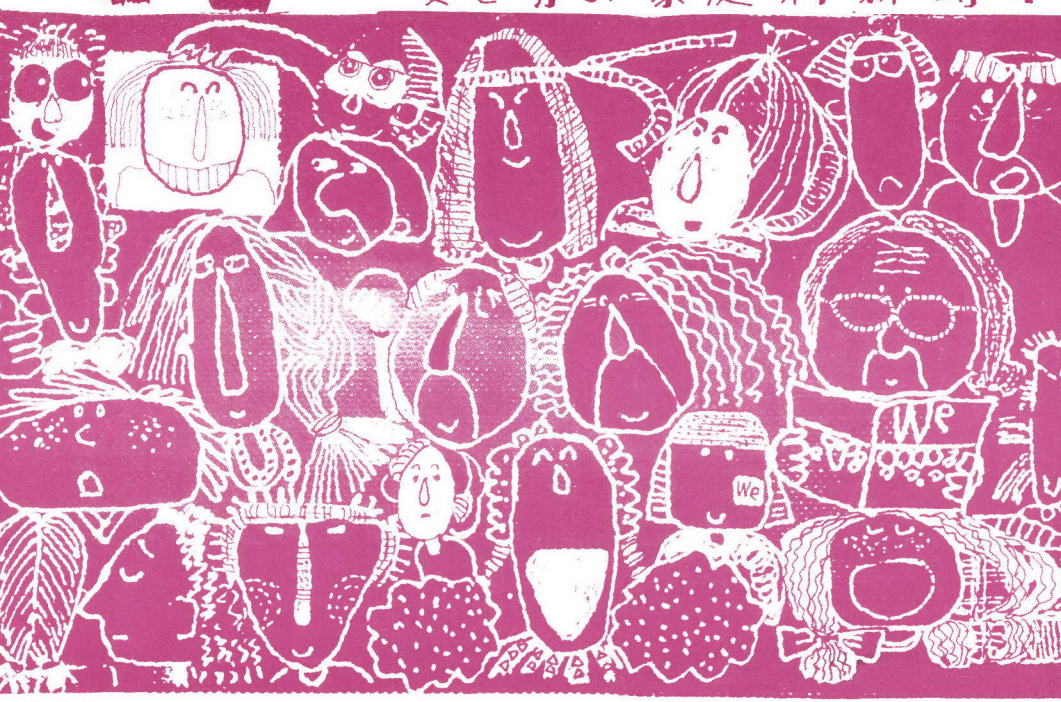
1994年7月15日発行（毎月1回15日発行）第3巻第4号（通巻24号）　1992年12月15日第三種郵便物認可

くらしと教育をつなぐ

We

女と男の家庭科新時代



1994
7

特集・産むのは私

インタビュー；片桐弘子「お産は異次元体験」，座談会「お産はおもしろい」，「中絶をめぐって」。私は産まない（麻賀衿子），祥太の時間（中畝治子），家・家族・家庭（井上輝子），連載；居場所考（水田宗子）他。

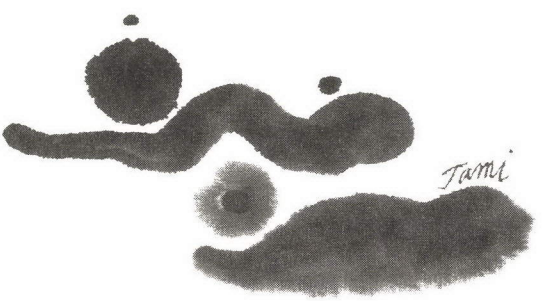
M. Kataoka
June 27 '90

くらしと教育をつなぐ

We

7月号

特集　産むのは私



女と男の家庭科新時代

■ 家庭科－遊ゆう・惑わく
－いのちを考える－　弥富　美枝 ……40

■ これでバッチリ家庭科玉手箱
浅井由利子　林　咲子 ……46

■ 共学家庭科の窓　石川　尚子 ……48

■ 家庭科転職情報《男性編》　南野　忠晴 ……61

連載

● 四人冗語　津田正夫 野村康子 武田秀夫 木村栄 ……36
● ホスピス千夜一夜物語　森津　純子 ……38
● わがままなまま，私のまんま　鈴木　真理 ……50
● きき耳ずきんの森から　井内　好子 ……52
● 木を植えた日　蒔田　直子 ……54
● オホーツクの潮風荒く　江口凡太郎 ……57
● 居場所考　水田　宗子 ……58

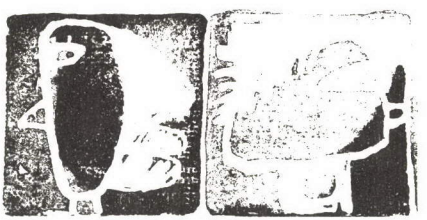
◇ Weの屋台村 ……62
◇ 編集後記 ……64

表紙デザイン/加藤由美子　題字・目次/川口民子，河村ふみ　カット/川口民子，加藤由美子

くらしと教育をつなぐ We
1994.7.　　自立した女と男を

〈インタビュー〉複眼でみる

片桐弘子さん（聞き手/沢田清美 まとめ/編集部）…… 4
「お産は異次元体験」



特集　産むのは私

☆ 座談会 「お産はおもしろい」
金房子　沢田清美　中畝治子　生田弘子　山下ひろみ ……12
（まとめ／生田弘子・編集部）

☆ 私は産まない　麻賀　衿子 ……17

☆ 座談会 「中絶をめぐって」
加藤典子　木村恵　平野淳子　小池弘子　（まとめ／編集部）……21

☆ 祥太の時間　中畝　治子 ……26

└ 私の本棚から　中村　泰子 ……29

＃ 家・家族・家庭（6）　井上　輝子 ……32

インタビュー

お産は異次元体験

片桐弘子さん

（聞き手・沢田清美　まとめ／編集部）

複眼でみる

片桐弘子さんのところでお産をした人が、思わず「魔女みたいね」と、ため息をもらしたという。そう言えば、近代医学は、「魔女狩り」による、女性民間治療師の抹殺によって成立したと聞く。これからは、また、魔女が活躍する時代になるといいな。

かたぎり・ひろこ
1951年新潟県生まれ。京都大学医療技術短期大学部専攻科助産学特別専攻卒。国立相模原病院・のぞみ助産院勤務を経て、'87年海老名に片桐助産院を開業。'90年より水中でのお産を始める。三男二女の母。著書に『生まれる瞬間』（地湧社）。

◆感じとることが大切

沢田　今、水中出産というところに行きつかれたわけですが、そこまで産むことにこだわり続けてきたのは？

片桐　わたしはお勉強ってものが好きじゃない。現場から気がついちゃうっていうか、自分の心の中にその都度わいてくる？マークっていうのがあるの。股を開かないと赤んぼは出てこられないの？　とか、臍の緒ってすぐ切るのと切らないのと何が違うの？　とか、顔が出ても身体を引っ張り出さないとどうなるの？　とか。誰も教えてくれないから、自分で試して見てさ。自分で子ども産む時も、グーっと陣痛がきて、わあ楽になったあ、と下を見ると、まだ顔までしか出てなくて。周りでいくら、いきめ、いきめって言ったって限度があるじゃない。それで、ここで引っ張り出さないと少し休んでいられるんだなあ、とか。それで次の陣痛で大きな体を出すためにまたグーっといきめて、「あーでたあ」とか「あーいらっしゃい」とか、思わず声が出ちゃう。そういう？マークを、何で？　って試し続けた結果でしかないのね。

　それと3人目産んだ時ね、あーいきみたい！　って戦慄のようなものを感じたわけ。いきんでいいよって言われていきむんじゃなく、自分の体に感じるものとしてね。それで、妊婦さんに「いきみたくなったら教えてね」って言ってると、人それぞれ違って、本人が感じるいきみって、周りでこんなもんだろうと思うよりもっと進行した状態なのね。いきみたいっていうのは、後から考えるとワクワクするような、ゾクゾクするような快感よね。

　やっぱり感じとることってさ、大切なんだよ。感じることがあれば、すべての経過を感じ切れちゃったら、体位がどうだったとか、切開しようがしまいがさ、破膜しようがしまいがさ、そんなものは、あんまり意味ないのよね。いろんなことってケースバイケースで、みんな標準の波に乗っているんじゃないんだよね。でも感じ切れてくるとさ、多少はずれていても許せちゃうっていう部分が出てくるのよ。

　だから失敗したって、マイナスに思いを残すんじゃなくってね。例えば流産した人なんかはね、子どもの存在感が無くなってきたことを感じながら、そのうちにちょっと血が出て、ああやっぱりそうかなって、少し心がそうなって、もう少し血が出て、お腹も痛くなってきて、ああやっぱり駄目だって……。感じてさえいればね、徐

々に身体が感じることに気持ちの変化をあわせもってくるから、最後、もう立派にこれを掃き出せた自分の身体に感謝したいって思ったりできるの。子どもの遺言のようなものでしょ。そんなふうなことで、この世に来られない赤ちゃんもいるんだなってことを受容できていくというか。それも自然っていうものが持ってる素晴らしさだと思うのね。

でも、この「自然」っていうことと「放ったらかす」っていうことは非常に混同されやすくて。私の考えている自然は放ったらかしのことじゃないんでね。やっぱり自然の中で、地球の裏っ側でもこっち側でも人間が生きていられるということは、「知恵」を使ってるっていうことでしょ。自分が書いていた出産スケジュールに乗り切らなくてさ、ほど遠い場合にはね、知恵を使うのよ。あなたの場合は、頭が入り切っていないんだから、上を向いてここに圧をかけて見ましょうよとか、あなたの場合はいきみたくないかもしれないけれど、陣痛がきた時に意識的にグーッといきんでごらん、とか。そうやって経過を見ていくわけ。要するにね、主導権が私にあるんじゃなくて、あなたたちがどういうふうな生き方で、どういうふうにあなたたちのところに来た命を迎え入れて、どういうふうに命を育んでいきたいかということが鮮明になれば、それをただ手伝うだけなんですよ。

結局はね、最初の出産が自分の身体に刷り込まれていくんですよ。身体が覚えてるの、細胞が。だからね、多少の難はあっても、産むところだけでも自然に産んでほしいなあっと思ってるわけ。例えば次に病院でね、足を結わえられたとしたって、最初の出産でね、赤んぼとのつながりの部分を感じられれば、それを思い出すからね。赤んぼのあの感じはこうなんだなって、赤んぼとの感触が明らかにあればさ、乗りきれるんだよ。

最近思うんだけどね。まだ日本ってところはノウハウを売り物にしてるんだよね。でもね、大事なのは産むときのポーズとかね、そういうものじゃないんだ、ほんとはね。自分が赤ちゃんと結びついている何かが確実に感じられたら、どういう格好だっていいと思うの。

現代人はうんとボケでね。頭が痛くなると頭痛薬飲んでね、ピタッと痛くなくなると「あー、これって効くよね、何て名前？」なんて聞いたりするじゃない。昔の人は梅干し貼る、なんてしてた。でも梅干し貼って少し良

くなっても、完全に良くならないと、現代人は効かないって判定を出してしまうわけ。これって怖いよ。梅干し貼ってちょっといい気がするっていうのを、効いてるって認識できたらね、私はもっと楽になれると思うよ。陣痛だって同じじゃない。ちょっとさすってもらったら、ちょっといいか……っていうのがあるから、次にすすめるよね。

私たちは塩を使うことを言っているんですよ。シャンプー使わないでね、塩で髪の毛も洗いなさい、顔洗いなさい、身体洗いなさいって言ってるわけ。妊娠中って身体がすごく酸素を欲しがってるのに、深呼吸なんかしてる生活でもない。毛穴がふさがっちゃうと酸素が引き込まれないでしょ。体毛って、20万本が自分の油の壺に浮いてるようなもんなわけ。石鹸を使っていると、石鹸って廃油で作るじゃない、油だよね、油ぬるとさ、毛が寝ちまう。毛が寝てると非常に鈍磨になっていくんですよ、感覚が。私たち女性は、理論的じゃなくて、感情的でいいんだよ。動物的臭覚や動物的感覚が鋭利になって、お腹の赤ちゃんに良くないところは行かない、やらない、食べないという部分は、気配で、この毛が気配を感じるわけ。だからそれを蘇らせていったら、いいんじゃない。

沢田　でも、今はみんな、その、感じるってことが難しいんですよね。

片桐　一昔前は〝楽なお産〟の追求だったのよ。楽って聞けばだよ、国境のない日本にいても、国境を越えて、他県でも行く。そういう時代だったと思うんだけど。あんなデカイものが産まれるんだから、痛くないって言う方がおかしいよね。それを痛くないなんて、そう思うことのほうが、もう不自然だよ。

沢田　痛みを忘れるために呼吸法で何とかしようとしがちですけど、〝痛み〟をそのまま受け入れたほうがいいんですよね。

片桐　そう、逃せないもん、絶対にね。ここが痛い、そこに赤んぼがいるんだもの。そこに意識を集中させるために、痛みって来る。

苦しいんだよー、でも、みんな、出産した後に「あー苦しかった、でも楽」ってね。変な表現だけど分かる？苦しかったけど、でも何かあるよねって、そこのところなのよね。その何かって、赤ちゃんが自分の胎内にいて、産道を通過してくる、あの感覚でしか味わえないのよ。

身体で感じられる感触と、赤んぼとの一体感。これは頭じゃないの、産道感覚だと思ってるの。そして赤ちゃんに「それでいいのよ、ちょっと痛いけど、頑張ってそこんところをぐっと押して進んで来なさいよ」って……。そういう部分なのね。やっぱり出産も、自分と赤んぼの世界にのめり込んでいる人のほうが楽ですよ、結果はね。

水中出産って、お湯が身体に楽っていうだけじゃなくて、そういう意味でもいいのよね。見ていると、大きい風呂だと隅にいくし、ちょっと薄暗いほうかいいし、それで緑とかいう部分があると、なおいい。心安らぐ環境なんだよね。周りを気にせずに子どものところへ十分に意識を持っていける……。

◆みんな日本にあったよ

片桐　イギリスの、キャロラインさんっていう助産婦さんを知ってるんだけど、同じよ、同じことやってるなーっていう感じ。あと、オーストラリアのエステル・マイヤーさん（＊1）て、イルカと一緒にやってる人だけど、私は英語は話せないけど、あの人とも、とってもね、フィーリングが合うの。あともう一人、アメリカのマリーナさん（＊2）も、会ったことないけど、感じることっていうのは、似通ってますよね。

マリーナさんが話してたんだけどね、多くのイルカたちが研究のために囲いの中に囲われてね、脳を切り開かれたり、いろいろ、イルカのことを探求しようと思って調べあげられたと。そして今、一つ一つ囲いの中から、外へ出しましょうという運動になってきているわけ。それと同じように妊婦もね、病院という囲いの中に閉じ込められ、どんどん詰め込まれて、そこで調べられたりいろいろやられたけど、やっぱりね、イルカと同じように、今、病院という囲いの中から、外へ、フリーにしてあげなくてはいけないというのは同じだって。安全を追求するがゆえに、身体を拘束し、心まで拘束してしまったことに対する、フリーになりたいという部分が再び出てきましたから、これって、やっぱり強いと思うよ。

日本には、全部、昔、あったよ。ラマーズ法（＊3）なんて、やっぱり心触れ合える人たちと一緒に出産をやりたいってわけだから、呼吸のことを言ってるわけじゃないからね。そしたら昔なんてね、産婆さんにもかかれない、お医者にもかかれない、なんていう所で夫が子ど

もを取り上げることだっていっぱいあるわけですね。

アクティブ・バース（＊4）の人たちってね、わりと体位に拘っていますけど、要するにしゃがむことが下手な西洋人が、しゃがんで産むのが楽だよっていうのがアクティブ・バースっていうんですよ。しゃがむなんていうのは日本人なんて誰でも上手。ましてや、しゃがむ時に人に支えてもらうことなく、産み綱につかまってね、しゃがむ姿勢を取ったなんてね、立派なもんじゃない。

水中出産（＊5）ね、みんな外国から来たもんだよ。だけどこれね、バスタブなんて使ってたあちらのシャワーの生活の人たちがさ、胸まで湯につかったら楽なんてさ、そんなもの、温泉国の日本なんて、みんな首まで湯につかってたよ。

ソフロロジー（＊6）？　禅の思想を持ってなんていったって、禅ってどこから来たんだよ。そう、みんな日本にあったよ。私たちにはそういう血が流れてるんだから、そんなこと勉強しなくたっていい。身体の中にはみんなある。

呼吸法だってさ、2日かかってる人と、一日で産んじゃう人と、呼吸なんて産む人によって、産む状況によって違うよね。それを「あっもう第2期になったからこうよー」なんてね、どうもそぐわないね。もう3日も4日もかかってる人は、あえぐよ。あえいで酸素運んでやらないと、細胞動かないし、脳だって寝ちゃうし。そんな時に、「はい、あなた、長く長く」なんて言ったってね、合わないよ。そういうものは無意識のうちに、全部、ほら、生きるためにあるんだもの、呼吸は。だからいいんだ、呼吸なんて意識しなくたって。

あっ、それからね、外国の助産婦さんから聞かれるんだけど、「何で日本の助産婦さんは人の心に入るんですか」って。そんなプライベートな世界に誰も侵入しないって言ってるわけ。確かにねー、プライベートだからね。セックスと思えばセックスとも思える現場にさ、何も他人が分け入って……っていう部分ありますよ。外国はさ、チュッチュもするし、そりゃあ私たち日本人が見たらはずかしいなあ、なんていう表現、いくらでもしてるじゃない。だから助産婦さんたちは、はたにいるわけですよ。でも日本人はそういう愛情表現ができないから、夫はさあ、どうしていいか分からないっていう部分あるでしょ。それと、公衆浴場なんて考えられないのよ、あちらの人

たち。恥ずかしくてね。ねー、何でそんなところにみんなが裸になっていられるのって言うわけ。行こう、行こうって誘うとさ、行けないわけよ。日本では隣に居たって公衆浴場みたいなもんだから、「あなたが居ると私、緊張して産めない」なんて人、一人もいないんですよ。「二人でいなさいよー」なんて言うと、「やー、先生ー、行かないでくださーい」なんて言って。でもそれは日本人の特徴だから、むしろ誇りに思ってますよ。裸になって公衆浴場にいって、お互いを分かち合えるっていうの、裸のつき合いよねーなんていうの、もうこれはあの人たちには多分一生理解できないでしょう。

それから、会陰が切れる切れないって、日本人はね、よく気にしますけど、外国人はみんな会陰が切れずに産まれるのかって言うとそうじゃなくて、切れてもあまり気にしない。これもね、民族的な特徴だなって。

それに隣に居て、一緒に水の中に入っていると、会陰も保護できるし、ちょっとお母さんがパニックみたいになっても、「赤ちゃん、ほら、ここにいるよ」って言うと、はっきり意識がそこに戻るでしょ。だから私たちは一緒に水に入っているんです。

◆みんなが癒される

沢田　へその緒がついた赤ちゃんと抱き合っている写真があって、それがすごく大事だと書いてありましたが、普通ああいうことさせてくれないですよね。へその緒もすぐ切っちゃうし、胎盤だってすぐ出しちゃうし、赤ちゃんだってすぐ沐浴に持っていかれちゃうし、せめて、そこだけはね、取っておいてほしいですよね。

片桐　そこが一番なのよ。赤ちゃんとお母さんが初めて触れ合うとき、赤ちゃんがね、出産のことでいろいろあったって、お母さんにね「ほんとに苦しかったねー、大丈夫だった？　もう大丈夫だよ、こっちに来たんだからね。ゆっくり呼吸して、ゆっくりお目め開けてごらん」とか、「ほら、いるよー」とかね。ただもうグーッと、何も言わないで抱き締められているだけだって、赤んぼってほんとに癒されると思う。生死を彷徨っているかのごとくなんだから、出産時っていうのは。

神聖なバリヤができるって本に書きましたけど、お母さんがね、周りにバリヤを張ってね、包んでいるっていう部分だからね。誰にも入れない。磁場が出るからね。でも見えないから、ビリビリってこないから、ほとんど

感覚の部分だけどね。だからそういう部分がチラッと出るとね、他のところはね、多少、どうだっていいんだよ。

お産ってすごく癒される部分だと思うよ、ほんとに。「おめでとう」なんてお母さんに言われる赤ちゃんなんて、最高よ。おめでとうなんていうのはお母さんが言われる言葉じゃなかったのよ、産まれた赤ちゃんよ。赤ちゃんがへその緒がついたまま、お母さんに「おめでとう」なんて言われて。癒されるっていうのは、そういう現場よ。すごい、とことん優しいっていうか、何ていうかね……こういうの、たぶん愛って言うんですよ。そう、もう無限だもの。そういう現場を垣間見れるから、すっごく心がきれいになるよね。それにね、あのポチョポチョとね、柔らかくてね、ピンクでね、ムチムチした肌の感触がたまらなく好きなのよぉー。だからやっぱりこの仕事続けて、あのポチョポチョお肉をこの辺に抱いていたいのよ。

＊1　エステル・マイヤー　オーストラリアのバースエデュケーター。イルカと人間のコミュニケーションの一つとして水中出産をとらえ、その実践で有名。

＊2　マリーナ・アルズガライ　アメリカのカリフォルニア州で自宅出産や水中出産をケアする開業助産婦。出産は芸術だと言う。

＊3　ラマーズ法　日本では、夫の立ち会いのもと独特の呼吸法で出産の痛みを和らげるというイメージでとらえられているが、フランスのラマーズ博士が旧ソ連の精神予防性無痛分娩法を参考に開発した。女性に知識と健康への自覚を促し、呼吸法やリラックス法に意識を集中することで痛みを逃す出産法である。フランス・アメリカを経由して70年代初めに日本に伝えられた。

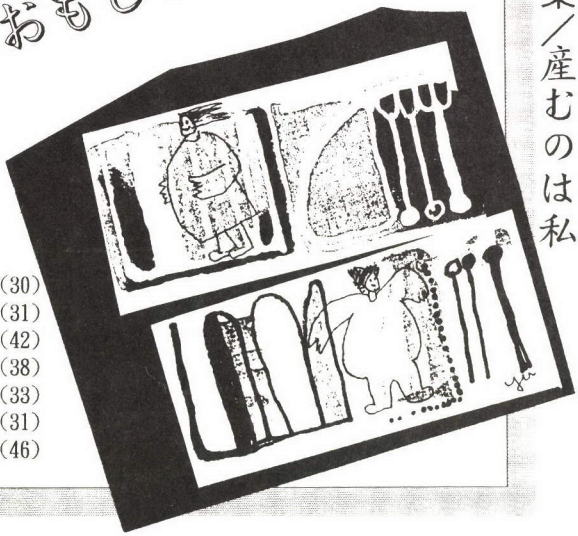
＊4　アクティブ・バース　産ませてもらう出産ではなく、自分の力で主体的に産む出産であり、自由な分娩姿勢をとることを特徴にしている。イギリスで発達した。

＊5　水中出産　小さな塩を入れた温水プールに入って、リラックスさせて痛みを逃しながら出産する。母体を保護し胎児の出産ショックも少ないと言われる。

＊6　ソフロロジー式分娩教育　東洋の禅とヨガを取り入れ、妊婦を心身ともにリラックスさせることを目的にした分娩教育法の一つ。

特集／産むのは私

座談会 お産はおもしろい



金　房子（30）
沢田　清美（31）
中畝　治子（42）
生田　弘子（38）
山下ひろみ（33）
中村　泰子（31）
稲邑　恭子（46）

＊産み方にこだわって

沢田　私は一人目を産んだときは、ラマーズ法の教科書通りみたいに呼吸をうまくやれて、でも、最後に子宮口が開いてきたときに人口的に破水させられてからは調子が狂って苦しくて苦しくて。それにあの仰臥位にも不自然さを感じたんです。

二人目の時、ミッシェル・オダンの『バース・リボーン』を読んで、あ、これだ、と思ったんですね。自然の流れに身を任せてみよう、叫びたいように叫んでみよう、姿勢もやりたいようにやってみようと、意識的にラマーズ法の知識を全部捨ててみたの。そしたら、思いがけない獣のような雄叫びが出てきて、でも、呼吸法で抑えているよりずっと楽なんです。ところが、さあ産む段になって、どの姿勢を取るか決められなくて、ジタバタしてしまって。かなり理解のある病院だったのだけど、普通の分娩台しかなくて、助産婦さんもそういう介助の仕方を知らなかったし、「先生！　大地に足をつけて、ふんばって産みたい！」と叫んだんだけど、医者も腕組みして、「フーム」とか言うだけなので、結局仰臥位で産むしかなかった。そのことに悔いが残っているので、三人

目を産むときは水中出産をしてみたいと思っています。

生田　私が産んだ助産院ではアクティブ・バースを取り入れていて、好きな格好していいと言われたけど、どうしていいかわからない。自分の中から湧いてこないのね。体操とか瞑想とかやって、内なる声を聴こうという練習は事前にやっているんだけど、私には内なる声が聞こえてこなかった。頭も体も硬いのかもしれないけど。雄叫びとか出せない私には、声を出してやる呼吸法は型があるのでかえってよかったみたいだった。

山下　私の場合は産みかたに全然こだわっていなくて、出て来るものは自然に出て来るだろうと思っていたの。ラマーズ法も、ブームになりすぎていたような気がしてたのでやろうとも思わなかった。でも、のんびり構えていて、予定日過ぎてから病院へ行ったら、子宮口が固くて、とにかく早く出さなきゃならない状態で、いきなり点滴されて、最後はおなかを押されて、吸引で出された。

三人目の時は、陣痛の間好きな格好して良いと言われて、いろんな格好してみたけど、立ってよりかかっているのが一番楽だった。産院が混んでて、忙しくて、医者も助産婦さんも構ってくれないのが幸いして自分のやりたいように自然にやれた。三人目めにして、やっと産んだという実感、快感がありました。

金　産むに当たって、みんなちゃんと考えを持っていたんですね、私は立ち会い出産の話を聞けば、それはいいな、マタニティスイミングの話を聞けばそれもいいなと、結構ミーハーだった。出産というものに対して、綺麗なイメージばかり先行していて。呼吸法とかも全然知らなくて、出産雑誌は読んでいたけれど、いいとこだけ見ていて。上の子は三十二時間かかって、看護婦さんたちの「おかしい、先生呼びましょうか」「でも、先生疲れているから」とかいう会話が聞こえてきて、「えーっ」と思いながら、ともかく早く出したいと思ったけど、仮死産で、脳性麻痺の障害が残りました。

中畝　私も、夫婦で、水道橋の「お産の学校」に行って、私は今はもう亡くなられたラマーズ法の先駆者の三森孔子さんの講習を受けたの。事前に勉強だけはいっぱいしたんだけれど、今考えると、それが全部裏目に出たんですよね。一生懸命やり過ぎて、過呼吸から過換気症候群になって、産み終わったときは全身しびれて動けなかった。そういうことも原因して、最初の子は重度の障害児

になってしまった。

ちょうど、お産が立て込んでいて、人手が足りないときで、「お産の学校」の優等生だったというので、「あなたは大丈夫だから、もうちょっと一人で頑張ってね」とほっとかれてしまった。そのときはまだ、夫の立ち会いはやっていなくて、一人で、一生懸命呼吸法をやっていたの。かたちだけ取り入れたラマーズ法ほど危険なものはないと思う。側で丁寧に経過を見てくれる人がいなければ、やってはいけないことだと思います。私の場合、何も知らないで普通にやっていたほうが、自然に産めたのじゃないかと、あとで真剣に思いました。

＊産むのはひとりで？

山下　一人目のときに他に産婦がいなくて、夫も陣痛室に入れたんです。触ってもらうと、痛みの感覚が違うと思った。側を離れられると痛みがそのまま来る。あれはつらかった。夫じゃなくても、側に誰かいてくれるといいなと思った。

沢田　うちの夫はずっと立ち会っていたけど、陣痛の波がくると、「ハイ、いきんでー」と、かけ声がすごくて、分娩台でも大声で、「イチ、ニ」と号令かけていた。でも、悪いけど、私はもうそれどころじゃなくて夫がいることも眼中にないって感じ。夫はその場で見られたことがいい体験だろうけど、もう、極限状態に至っては、私にとっては彼はいてもいなくても同じ。お医者さんも助産婦さんも夫もいて、多いときは周りに五人くらいいても、痛いのは誰も取り除いてくれるわけじゃないし、結局自分で産むしかない。みんなの見ている前で、足を広げてすべてさらけ出して、自力で何とかするしかないわけでしょう。あれはすごい体験ですよね。女はこうやって強くなっていくんだと感じました。

中畝　うちは一番目の時に失敗しているから、彼がすごく綿密に記録をつけるわけ。側でずっとメモばっかりとっている（笑）。何時何分にどうこうとか。でもね、やっぱり、いてくれたから、安心でリラックスできた。

金　二人目の時、陣痛室に夫が来てくれたの。陣痛が強くなって、何かにすがりたい感じになって、それをこらえているときに夫が「ごめんな、ごめんな、こんな思いさせて」なんて言い出して、極め付けは「産み終わったら、温泉行こうな」（笑）。それどころじゃないって言うの。「あっち行って」と言いたいところをぐっと抑え

て、「悪いんだけど、出て行ってくれない？」と穏やかに言ったのね。夫は、あとで、ショックだったと言ってた。何もできないけど、居てやりたかった、甘えて欲しかったって。

沢田　私ね、妊娠、出産を通して感じたのは、自分が動物のメスだってこと。猫だってお産の最中は気が立って子ども殺しちゃったりすることがあるでしょう。人間もそうなんだと思う。産む直前直後は、一人でいたいと本能的に感じた。よく、女は子宮で感じると言われるでしょう。妊娠すると、子宮を中心として、妙に体中が充血してるというか、心身共に充血している感じがしたの。

山下　私もそう思った。妊娠してすぐかな、それまで醒めた目で見てたことに胸が熱くなったり、変に突っ張っていた部分が取れたのかな。

沢田　産んだ後も、産む前とは違うものの感じかたをしているなと思う。そんなことなかった？

中畝　私は変わらなかった。生活は変わったけど。意識する部分が変わるというのはあるね。産んだからじゃなくて、育てながら変わるんじゃないかな。

金　私って、きっと、出産には向いていないのかも知れない。妊娠中も、体重を気にしたり、好きな洋服を着られなくなって悲しいとか考えていた。つわりもひどく、九ヶ月近くまであったけど、夫に「それは子どもを無意識の内に拒否しているからじゃないか」と言われて、ショックだった。でも、妊娠して、自分の女の部分がなくなっていくのが嫌で。

中畝　面白いね。私なんか、普段は女として生きている自覚ないから、逆に子どもがお腹にいたときだけ、「ああ、女なんだ」と感じたけどね。

稲邑　私はほとんど考えずになりゆきで三人産んでしまった人なのだけど、グロフの過呼吸のワークショップに参加して深くて、速い呼吸をしていたときに、この感覚、なんか記憶がある、あっ、お産のときだと思いだしてハッとしたの。お産の体験をもっと積極的に引き受けて、くぐりぬけていれば、自分を変えられるまたとないチャンスになったのにもったいないことしたなと。胎児にとっては産道をくぐり抜ける体験って、ある種の煉獄というかすごい体験で、その出産時の体験が人格形成に重大な影響を及ぼすという学説はあるし、過呼吸のワークをやっていたときに、その産道にいた記憶が幻覚として出

てくることがあるのね。私なんか、子ども産むとき、自分が痛いことばかりで、出て来る赤ちゃんのことなんか考えていなかった。痛みから逃げるのではなく、大変な思いをして出てくる赤ちゃんと一緒にそれを引き受けていくという自覚があるかないかで、随分違ってくるのじゃないかと思うけど、みなさんの場合はどうでした？

中村　私は、本読んでいろいろ考えていたりしたけど、みんなで呼吸法の練習しているとこには行く気がしなくて、一人だけで一回というコースもありますよと言われて、ラマーズ法の「お産の学校」に行ったの。そこで、「痛いのは、胎児が出ようとして一生懸命産道を押しているから、そこに赤ちゃんがいて頑張っているってことだよ。その痛みが変わっていくでしょう。それで、お産がどう進んでいるか、自分で感じるんだよ」と言われて、ああそうかと思えたのはすごく良かったと思う。自分で産むって覚悟があってお医者さんと話して納得できれば、どこの産院で産んだっていいんだよと言われたことも。初めての時は痛くてオロオロしたけど、それでもお産の進み具合を自分で感じることができたと思う。

沢田　私も産むときに子どもを苦しめたという気持ちはあって、赤ん坊を見たとき、ごめんね、ごめんねっていうことばがでてきて涙がぼろぼろこぼれた。頭で意識していなくてもそういう感覚はあったと思う。でも、その思い入れも二人目はそれほどではなかったから、だんだんなくなっているのかなあ。

生田　痛いのは自分だけで、助産婦さんも夫も痛みは共有できていないわけでしょう。でも、実は赤ん坊とだけは共有できているのよね、と、頭では分かるけど、その場になったら、夢中で、そんな、へその緒でつながっているとはいえ、他人のことまで考えられないけどね。

中畝　私、この頃、思うんだけどね、仕事を中心に考えると、家事とか子どもにまつわることって色あせて見えるでしょ。でもね、これくらいの年になると、自分が何を成し遂げられるかと考えると、大したことできないなあって。そうすると、子どもを育てて、続いていくことって、大事なのよね。もしかして、その部分が淡々とつながって行くのが人間本来の営みかなと思っちゃって。

中村　でも、その、淡々と、がなかなかできないのよね。

中畝　うん、できない。家にいる日が三日続くだけでもパニックになるもの。

私は産まない

麻賀衿子

◆もうすぐ三〇歳……産まない私

私は子どもがあまり好きではない。周囲の未婚の女たちが、愛らしく笑う乳飲み子を〝可愛い可愛い〟とあやすのを見ても、触りたいとも思わない。食べ物や健康に日常よりも何倍も気を使い、行動も制限される妊婦にも、なりたくない。無事に出産に漕ぎ着けたとしても、今の地球環境や諸々の社会状況を考えると、自分にとっても、子どもにとっても、幸せとは思えない。仕事も遊びも、誰にも縛られないでとにかくしたい。惚れた男とはお互い自由に、会いたいときに会い、その愛情は私だけが独占したい。妻や母親という役割で生きるなんて、まっぴら。こんな私が子どもを産んだとしたら、幼児虐待なんかに走りかねない。近頃は、産んでみたら「子どもが好きになれない」、「好きなことができない」なんて、ぼやく人も多いけど、産む前からそんなことわかってる。今から思えば、高校の時に物覚えはあんまり良くないはずなのに、保健の避妊のテストが満点近かったのも、倫社でボーヴォワールに傾倒したのも、子どもも結婚もパスするための準備だった。

心理学なんぞ齧っている人に、幼児期になんかあったんじゃないかと、ビョーキ扱いされたこともある。でも、それは〝春菊が食べられない〟とか〝栗尾美恵子が好きになれない〟とかいったところの、ライフスタイルにおける好みの問題なのであって、別にビョーキではない（……と思う）。それに、子どもが苦手といっても、私

は他人に冷たい人間でもない（……と思う）。「心底好きな人ができたら、変わる」という下馬評も蹴散らし、今の私は、結婚も子どももパスして、大好きな男もいて、私生活はそこそこ楽しい。

裏腹に周囲の雑音は、日に日に増している。公私ともに、女性問題と関わり続けてることを知る周囲の同性たちまでもが、〝適齢期〟や〝人は結婚して子どもをもつのは当たり前〟という常識（ものさし）で私をつつく。「結婚や子どもを持つという経験がなければ、主婦の置かれている状況や夫婦間の性別役割分業観といった女性問題だってわからないのでは？」「子どもを持つと視野も広がる」と、外野は言う。数々の雑音に、私は苛立ちながら、あれこれと産まない理由を並べてみる。が、雑音の源となる人々の声は、あまりにも多数派であるが故に大き過ぎて、私の声は届かないし、説得力のあるセリフはみつからない。私は、同年代の〝産むこと〟をリアルにとらえていそうな女性たちの話を参考に、〝産まない理由〟の理論化を試みた。

◆三〇代……それぞれの産まない・産む選択

阿木裕子（仮名）さん、三〇歳。昼は女性問題周辺の非営利団体で働き、夜は在日朝鮮・韓国の人々の自主市民講座に関わっている。二四時間フル稼働の彼女が、今年結婚した。彼女の感情も、今のパートナーと出会う以前から、〝産まない〟方に傾いていた。彼女の職場に、子どもを産んで働き続けている前例がないことも一因だが、それだけではない。「子どもって、お金がかかるし、時間のロス。子どもは可愛くて天使だなんて言う人もいるけど、思いどおりにいかない人間だと思う」。パートナーは、子どもを持つことに消極的ではないが、彼女は「もし、私が子どもを産むとしたら、全面的に子育ては彼がやるというのが、条件」とする。

裕子さんが、産まないという理由の一つに、職場環境を挙げたのに対して、「前例を作ろう」としているのが、三三歳のデザイナー、堀井香織（仮名）さんである。結婚して七年、二ヶ月後には出産を控えている。香織さんの勤務する、小さなデザイン事務所は、せいぜい産前産後計二ヶ月程度の休暇しかない。「出産後しばらくは、在宅で仕事をこなすつもり。身分は社員のままだけど、給与はこれまでの半額」になる。彼女は結婚当初から、〝夫に養ってもらう〟ことには抵抗を感じていた。だか

ら、たとえ給与が半減したとしても、「自分と子どもが食べていける最低限のお金位は稼げる」という。

結婚当初から、子どもが欲しくないわけではなかった彼女が、これまで出産を躊躇してきたのは、経済面・精神面両方の自信がなかったからだ。それは、同じ職場で企画・営業をする、同い年の夫も同様だったらしい。彼女にとっての、〃産みどき〃がめぐってきたのは、年齢の壁と、独立しても稼げそうという自信、そして、七年の共働きの中、彼女の働きかけによって、家事にも積極的に関わり出すようになった夫の変化が大きな要因となっている。「子どもができたってわかった時から、前にも増して、夫は家事に協力的になった。食事の後の食器洗いも洗濯もすすんでやるし、休日の買い物も一緒にでかける」。「結婚している友人たちは、自分も夫もそれぞれがやりたい仕事（夢）を持っている。でも、子どもができると、夫は以前と同じく仕事が続けられるけど、妻は育児の負担によって、〃できる範囲〃で仕事を続けるか、続けたいという気持ちを持ちつつ、ほとんど仕事から遠ざかってしまう。男も女も、平等に自分の夢を追う権利はあるはずなのに」。彼女は、夢を追い続けられるか？　それには、自身の強い意志と、今以上の夫の家事・育児〃参画〃（〃協力〃ではない）が重要となってくる。

香織さんは、〃産む理由〃を、条件が整ったからと答えたことになる。が、「なぜ、子どもを産みたいかを聞かれると困る」という。彼女は、もともと〃産みたい〃という感情を持ち続け、それを満たすための努力を続けてきた。私の〃産むこと〃の当然視への疑問、〃産まない〃〃産めない〃ことへの差別・偏見への思いを聞いて、彼女は「私はこれまで〃産む〃ことしか考えてなかった。けれど、〃産まない〃〃産めない〃という立場の人のことも、考えなくてはいけないのですね」と語る。それは、世間がいかに〃人は結婚し、子どもを産み育てることが幸せ〃という情報をふりまいてきたかの一断面かも知れない。

私は、ハタと思った。自分は、産まない理由をあれこれ問われてきた。とはいえ、私にそれを問う〃産んだ人〃たちは、産んだ理由を私に明確に語り得ていたか？　答えはNO。だから、私がうまく、産まない理由を語れなくても良いのではないだろうか？　ただ、〃産めない〃

〝産まない〟ことへの、差別や偏見に闘うためにも、私は自らの選択を大切にして、自らで〝産まない〟幸せを伝えてみたいとは思う。

内田美紀（仮名）さん、三七歳。結婚してやはり七年になる。彼女は公務員、夫は大学の教員。福利厚生面も、時間的な面も、子どもをもつには恵まれた環境にある。結婚当初、児童館勤務だった美紀さんは、子育ての大変さを仕事で実感しつつも、漠然と「自分は子育てを楽しんでみたい。夫は子育てを主体的に自分でしてみたいと思っていた」。が、彼女は妊娠しなかった。どちらが原因とも、わからない。子どもができることも、できないことも自然なのだという結論を、夫と導き出し、病院に足を運ぶことをしなかったのだ。彼女が悩んでいた時に聞いた母親の告白が、その一契機だった。「母は三人目を産んだ後、避妊リングを入れたけど、私を妊娠してしまった。だから、父は私が産まれてくるまで、出産には納得してなかったらしいの。女という身体の機能を使ってみたいという思いは今もある。だけど、それを聞いて、夫婦双方が納得した、もっと積極的な理由がなければ、子どもを産むこともないか……と、思った。あの時なぜ、〝産みたい〟心が、こんなにも変化したかは、うまく整理しきれないのだけどね」。「子どものいないお互いを結び付けるものは、愛情」と、夫とは誰もがうらやむほどに仲が良い。子育ての経験を高く評価する人々は、彼女の〝不妊〟を越えて、学んだ事実と得た幸福を、どうみるだろうか？

◆やっぱり、私は産まない

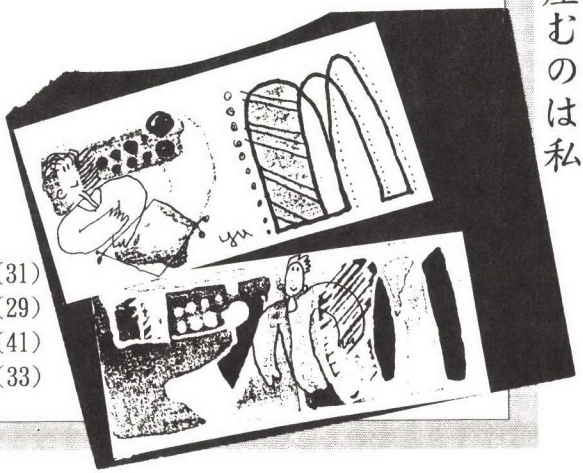
取材で出会った女性たちは、性別役割分業観を含めた子育てを巡る社会状況をちゃんと見て、〝果たして今の自分が産むことが適切なのか〟をきちんと考えているから、〝産むこと〟を躊躇する（した）。それは、浅はか（おばさんぽい）な経験論（じぶんのリアリズム）を振り翳し、〝産まない〟ことを差別や偏見でぐだぐだ言う人たちより、はるかに賢い選択だ。

私は今も、〝産まない理由〟を明確な言葉にできない。が、こう言い放てる自信は生じた。

「私の選択も、自分と社会を見据えた結果だし、幸せなの。なんか文句ある?!」。（東京ＯＬ学会）

特集／産むのは私

座談会 中絶をめぐって



加藤典子（31）
木村　恵（29）
平野淳子（41）
小池弘子（33）

加藤　小学校三年の時なんだけど、胸が膨らんできて、それがこそばゆくて、痛くて。その胸を男の子が触るっていうより、掴みにくるの。体育の時間に胸が揺れるのを冷やかされたり、そういうシーンを鮮明に覚えてるんだけど、自分の体が変わっていくのがすごく嫌だった。それに母の女おんなしたところも嫌で、女って嫌だなと思ってきた。それはそれでやってきたんだけど、中絶した時は、なんでこんな目にあうのかと、ほんとに女であることを恨んだ。

木村　私は女が嫌だとか、女ばっかりって思ったことは一度もないの。全部良かったと思ってる。

中絶したのは17の時。気がついたのは4か月の終り。生理が不順だったから、自分では全然気づかなかった。結構遊び惚けてて、高校を中退して働いてた。産むとか産まないより、この体を元にもどさなきゃ、そればっかり。産むなんて考えなかった。生活を変えたくない。仕事も遊びも、今が楽しい、変えたくない、それしか考えなかった。彼がなんと言おうと関係なく、産むなんて、母になるなんてことは選択肢に無かった。楽しかったの、毎日すごく。それで良かった。

自分がどうのこうのというのはないし、相手に対しての怒りも無かった。好きだからセックスしたんだし、それはしょうがないと思ってた。私じゃなく彼が気づいたの。おかしくない？　生理無いみたいだけどって、病院に付き添ってくれて。彼はしょっちゅうそのことを気にして、愛してたから命が宿ったんだと話していて、でも命を絶ったってこと気にしてた。そのあと何年もたって、私が結婚する時手紙がきて、思い出したくないようなこと延々と書いあるの。今でも子どもの命を絶ったことに責任を感じている、お詫びをしたい、幸せになってほしいって書いてあった。すごい素敵な人だったんだよね。

でも、手術の時「あっ、男の子だ」と言うのが聞こえて、その時初めて、あっ、自分が殺したなと思った。この子をどうするのかなと、うつらうつらしながら考えてた。家に帰れなかった。とてつもなく可愛そうなことをしたなあと。自分はいいんだけど、自分で気がつかないうちに命を殺した。自分が快楽を求めたツケ。遊ぶことしか考えないで後先を考えないできて、初めてハッとしたんだよね。その後はかなり気をつけるようになった。同じことを繰り返したくはなかったから。子どもが一人いるんだけど、二人目がなかなかできないのもそのせいかなって、今でもチラッと思うことがある。

小さい時から、親に怒られるのがすごく嫌だったの。15の時初めて、ただ興味本位でセックスして、結局痛くてできなかったんだけど、妊娠するんじゃないかと不安になって……それで怖くなって、家にも帰れなくて。冗談のように「したよ～」とか友達と話できるけど、どうしたら本当に子どもができるのかとか分からなくて、誰にも聞けなくて。別にその人のことが好きだったわけじゃないんだけど、家にいても誰も助けてくれないと思って、寂しくて。結局、半年ぐらい家出したの。

母はすごく真面目な人で、道徳の勉強とかしてて、障害者の人とかに手を貸してあげなさいとか、合成洗剤はダメとか……。母の言うことも分かるわけ。父さんはすごいドラ息子で、うちは床屋なんだけど、お店が暇になるとすぐパチンコ行っちゃうような人で。おばあちゃんも「男は好きにさせとくもんだ」とか言って、いつも母さんだけいろいろ言われて。そんな父さんからも可愛がってもらえなくて、洗濯しながら「離婚したいなあ」とか言ってるの。分かるんだけど、そういうのがすごく嫌

で、腹が立って……。だから、「離婚したら母さんと来る?」とか聞かれると、「嫌、父さんといる」とか言ったりして。ああいうふうにはなりたくないと思って、全部裏返しにしてきた。こうしなさい、ああしなさいと言われるのが嫌で、反発することばかりしてきた。でも私が家出したとき、母はノイローゼになって、自殺しようとしたって聞いて、何でこんなこと引き起こしたりするんだろうと思うけど、いつも訳の分からない不安があった。

ある時、うちの両親には性的関係が全くないというのが分かった。母は、父さんに全然可愛がられてないし。私は女として可愛がられたいと思った。だからチャラチャラされるとすごく嬉しいわけ。どうやったら男の子と手を繋げるかを一生懸命考えたりしてた。

平野　私が中絶した時は、二人とも大学院に入ったばかりで、産むなんて全く考えなかった。親に相談したら、「あの先生なら安心よ」と言われて、自分の生まれた病院でおろしたくらいに、抵抗が無かった。親も学生結婚で多分そういうことがあったんじゃないかと思うの。

うちの親は良く言えばモラルに囚われない目茶苦茶な夫婦だったから、そういう意味では私も道徳とかに縛られることがなかったけど、子どもとしてはそんな親は嫌だったし、不安でしたよね。父親はもうしょうがないけど、母は女として生きるより、母親でいてくれると安心だし、楽だなあと。でも最近、あれはあれで良かった、だから私はいろんなことに囚われないで、自分に正直でいられるのかもしれないなあと。自分の許容範囲はすべてに渡って、すごく広くなりましたから。

加藤　うちは夫婦仲が良くて、はたから見れば良い家庭だったから、今、自分の身にいろいろ起こってみると、戸惑うばかりで、何で自分ばかり……というのが強くて。ようやく、何だってあるよな人生は、人間なんてこんなもんだよな、と思えるようになったけど。

平野　父は仕事ばかりしている人で、彼にとって家庭は実態のない観念的なものだったのじゃないか。家は綺麗で、奥さんも教養があって、子どももよく勉強してって。いつも付き合ってる人がいて、その彼女にうちはいい家庭だと自慢してたりするわけ。へたすると私に会わせたり……。今だにその女性が私に電話してきたりして、父の人柄なんだろうけど、変な人だよねえ。

母はそんな状況で自分を持て余して、私が中学生になった頃には、多分、更年期で自分が女でなくなるんじゃないかというあせりが出てきたのかなあ、「燃えるような恋がしたい」とか、そういうことを娘に言うわけ。それで駆け落ちして自殺未遂したりして。娘としては、安心できる「正しい家庭」を作ってほしいのに、親に男と女をやられちゃうから……。だから弟も、「あれはできないよなあ、ぼくは家庭を大事にしちゃうよ。真面目になっちゃうよ」と言ってますけど。

だから、母が女の部分にこだわるのが嫌で、女らしいなんて人間の価値じゃないとか思ってて。その反動かな、自分が女だってことを意識したことがなかった。

小池　うちの場合は、一見いい家庭だったんだけど、父が別の女の人を作ってお金も入れないで勝手にしてるのを、母がじっと耐えて、待ってて。いつも内職してた。親は知らないと思ってたみたいだけど、もう小学校に入る前に、そういうのって子ども心に分かるんですよね。なんでそんなに待つのか、なんでそんなに自分を殺して耐えるのか、嫌だって逃げ出さないのかと思っていた。子どもに八つ当たりもしないし、でもそれが嫌で、母のようにはなりたくないと思ってきたの。

でも、私自身、石橋を叩いても渡らないタイプだったから、自分に正直に生きていないというのが引っかかっていて、処女がうっとおしくて、相手が好きで選んだわけじゃなくて、セックスしたようなところがあるの。だから子どもができた時は、産むなんて初めから考えていなかった。もともと望んでできたのではないし、相手は別にどうでも良かった人だから、相手への恨みもない。

病院も目立たないところを選んで、感じのいいお年寄りの先生で、「元気な赤ちゃんですよ」と言われたけど、「産めない」と言うと、いろいろ説明を受けて。麻酔から覚めた時、「これが赤ちゃんですよ」と見せられたんですね。多分一瞬だったんだけど、すごく綺麗で、ほんとにピンクでつやつやしていて。目をそらしてからも涙が止まらなくて、子どもを殺したなあと思った。ちゃんと近くのお寺で供養するからとお医者さんに言われて、それでもずっと涙が止まらなくて、子どもに対してすごく後ろめたさがありました。

中絶のことはずっと誰にも話せなかったんだけど、この間、夫に話してみたの。それで、私がずっと話せなか

ったのは、別の男の人とそういうことがあったことが後ろめたいんじゃなくて、子どもの命を絶ったこと、子どもに対して後ろめたかったんだなと分かったんです。

加藤　私は、ただ、怖かった。どうやって中絶するかなんて何も知らないじゃない。どっちにしろ早くしなければと、そればかりで悶々として、目立たない町医者を探して……。いわゆる産婦人科の検診も初めてだったから、自分でも触ったこともないところに、金属の何て言うんだっけ？　あれを入れられた時にゾーっとして鳥肌がたったこととか、麻酔を打たれて数を数える間もこのまま意識が戻らなかったら……とか、手術台の冷んやりした感じとか、器具のカチャカチャした音とか、今も覚えてるものね。シーンとした手術室にひとり、目が覚めた時、「ああ、取り返しのつかないことをしたな」と思った。

　相手に今はまだ子どもは要らないと言われて、一人じゃ産めないと思った。まだやりたいこともあるとか、自分さえ持て余してるのにこんな自分が親にはなれないとか、未婚の母はまずいんじゃないかとか、いろいろ産めない理由を見つけようとしたし、中絶した後も自分で決めたんだからと自分に納得させようとするんだけど、産もうと思ったら産めたのに……と思うから、しばらくの間は思い出しては泣いていた。やっぱり、どこにも殺していい理由は見つからなかったから、どこかでいつも彼のせいにしてきたと思う。子どもに対して後ろめたいだけじゃなくて、自分がとても惨めでかわいそうだった。

　だから子どもを産みたかった。自分のこころとからだを取り戻したいという感じで、最初の子はすごく思いを込めて産んだ。初めて自分のからだを愛しんだような気がして、うれしかった。その後二人で中絶のことを話したことはなかったけど、自分が精神的に不安定になったとき思い出すのは、その時のことばかりで、今でも自分では癒し切れない傷としてあるんだなあと驚いてる。でも殺したとは思いたくないから命とは言いたくないし……ずっと話せなかった、誰にも。

平野　生命がどこから始まるのか、っていうのは難しい問題だと思うけど、ある本の中で、子どもを産むことに決めた障害者の女性が、「胎児は女が産むと決めた時から命としてその権利を持つのだと、私は思う」と書いてあって、なるほどなと思ったの。産みたかったから、迷ったから、辛いんだよね、きっと。

特集／産むのは私

祥太の時間

中畝治子

私の長男、祥太は脳性小児麻痺による四肢体幹機能障害、難治性てんかん。身体的にも、知的にも最重度の障害児です。寝たきりで、座ることすらできません。食事から排泄まで、全面介助を必要とします。呼吸も、食べるのも下手です。

祥太が産まれて、重い障害を負っていることがわかったとき、「そういう子は助からないほうが良かった。考えのある医者なら、何らかの形で処分したでしょう」と、父の友人である医師が言ったと、あとから聞きました。今考えると、恐ろしいことですが、そのときの私の中にはそうした発言を否定しきれないものがありました。

絶望的な気分でした。「最低だ、最低だ」と、気がつくとつぶやいていました。もう絶対に幸せになれない。この子を抱えて、幸せなんてありえないと思いました。涙が止めどもなく流れ、幸せになれないのなら、死んだほうがましだと思いました。

障害の原因が出産時の酸欠であると人に伝えることが自分にとって、重要なことでした。先天性のものではない、私のせいじゃないんです。この子は劣っていますが、私は違います。悲しいことに、そんなことばかりを、心の中で叫んでいました。

それまで、自分は、障害を持つ人や弱い人たちに対して差別感を持つなどということはないと思ってきました。でも、そのときの私は、障害のある子どもの生きる意味なんて考えたこともなかったし、障害を持つ人に対して、気の毒だという気持ち以上のものは持ったことがなかった。能力が高いことがとてもいいことだと思っていて、競争に勝つことが誇らしく、負けた人のことを思いやることもなかったと思います。

祥太を看ながら、私は少しずつ少しずつ、それまで自分を縛っていたものから自由になっていきました。ほと

んど何もできない祥太の存在が、意味の無いものとは考えられなくなってきました。こういう祥太がここにいて、私たちが大切に育てている。共に生きている。それだけでいいと思えるようになってきました。

障害者問題への理解を求めるときによく使われる表現に、「私たちも歳をとれば、障害者になる可能性がある。交通事故にあうかも知れない。だから、他人事ではなく、自分たちの問題として考えなければならない」というのがあります。障害者問題に限らず、差別の問題が語られるときのお決まりのアプローチで、問題を自分のことに引きつけて考えてもらうには分かりやすく、納得させ易い表現かもしれないと思いながら、いつも、どこかひっかかるものを感じてきました。

「あなただって障害者になるかもしれない、だから、運悪く障害者になった人を差別してはいけません」ということは、結局のところ、障害を持った人は、あるべき水準からはずれたかわいそうな人としてしか存在しないということではないのか。同情はいらない。そんな「もしも……」の置き換えを介さないで、健常であるあなたと、障害を持つ人との今ここの関係のなかで何かを感じとってもらいたいと思うのです。

祥太を抱いていると、私も、家の中も、祥太の時間、祥太のリズムになっていきます。何かをしなくては、させなくてはと動いてしまいがちの自分がふっと消えて、普段自分が背負っている諸々のものの意味がなくなっていく深いやすらぎの時間です。抱いているはずの私のほうが祥太の持つ世界に包まれているようです。

祥太は自分の身の周りのすべてのことを周囲の人に託することによって、私たちに生きることのいろいろな意味を突きつけているように思います。ときどき、この人ほど、完璧な存在感を持つ人はいないのではないかとさえ感じさせられます。この人はこれから先ずっとすべてを人に託して生きていくのだなと思うと、それがすごいことのように思えて、胸が熱くなります。

今のこの社会で障害児を育てることは、やはり大変なことです。仕事を持っていた女性が障害児を育てながら働き続けることが、ほとんど許されない社会です。そう

した状況にあって、どうしても障害児を産めない、産みたくないということも、決して責められない。でも、もしもそういうことになったとき、何の抵抗もなく中絶してしまうようなことはあってほしくない。そのことにひっかかってほしい。そこで命ということについて、障害を持つ人のこと、そして、障害を持った子どもを愛して育てている人のことを考えてほしいと思うのです。

人々が多様な価値観を持ち、それを認め合えれば、障害を持った人も含めて、より多くの人が生きやすい社会になると思います。障害を持った子どもを育てることも、決して困難なことではなくなるでしょう。人が気づかないような大切なメッセージを送ってくれる障害児。彼らは共に生きているからこそ私たちにメッセージを送ることができる。だからこそ、彼らが生きることを拒否して欲しくないと思うのです。

思い返してみると、祥太を産んだとき失ったと思った幸せとは何だったのでしょう。本当に大切なものは何も失ってはいなかったのに。でも、そういう私にしても、祥太が十歳になる今ごろになってようやく、世間に向かって言ってもいいかなと思うようになったのですから。

（日本画家）

私の本棚

沢田清美　中村泰子

『お産革命』（藤田真一／朝日新聞社）

私はこれを一人目の妊娠中に読み、お産に対する考え方を変えさせられた。日本のお産の歴史を踏まえ、「出してもらうお産」から、「夫婦協力して産むお産」へ進むべきだとしめくくられている。

『バース・リボーン―よみがえる出産』（ミッシェル・オダン著／久靖監訳／佐藤由美子・きくちさかえ訳／現代書館）

「女性には素晴らしい能力があり、それを有効に生かすためには、何の準備もいらず、むしろ逆に今まで頭で学習してきたものを意識的に削ぎ落とす作業が必要」。

お産はもっと自由で自然なものでいいはずだ。おなかの赤ん坊との世界に没頭しきれたらどんなに素晴らしいだろうかと思う。

（沢田清美）

◆私たちのお産文化観

「安全」を追及するあまり過剰な医療介入が進み、ハイテク危機に管理され、身動きもできない、そんな苦しい出産が批判されて久しい。しかし、〝自由なお産〟をと言われる中で、自分が産む、その主体であるという自覚がどれ程あるだろうか。

自らの辛い出産体験から出発して、よいお産とは何かを文化人類学的調査によって探った**『お産と出会う』**（吉村典子著／勁草書房）は、医療まかせのお産ではなく、産む側から発想することを主張してとても新鮮だった。そして、お産のメカニズムや歴史、不妊治療や最先端技術による出産の現状を語り、より広い視野から「いいお産」を考えようとしたのが、**『子どもを産む』**（吉村典子著／岩波新書）だ。お産をトータルに把握するにはとてもよくまとめられた本だと思う。

自分の住んでいる愛媛県の出産の変遷を調べ「日本には地域にあったお産の知恵があった」と、消えた伝統的出産スタイルがあったことを伝えてくれる。例えば愛媛県の山間部では、夫が背中から抱き抱えるように介助し、家族全員で出産を迎える風習があった。また島では、とりあげ婆さんに前から支えてもらって出産し、二度目からは一人で出産するのが立派な嫁とされたという。いずれの場合も「座産」で、山間部では隣家と離れているためか介助するのは夫、一方海で男が働く島では地域の女たちと、それぞれの暮らしにあったやり方だった。そして、「都会のお産（仰臥してするお産）と村のお産（座ってするお産）をしたが、そりゃあ村のお産のほうがずっと産みよかった」と、どの人も打ち明けてくれたという。

『赤ちゃんを産むということ―社会学からのこころみ』（船橋恵子著／NHKブックス）も、出産を社会的なものととらえ、トータルに問い直そうとした本である。出産をめぐる問題や、歴史、現状を知るよい手

がかりになるだろう。

出産に立ち会う男たちは、次の三つのタイプに分かれるというくだりには、思わず笑ってしまった。まず、「共生喜痴型」。出産なんて男がのぞくものではないと信じて疑わない家長的な夫や、女性を性的快感を得るための手段としてしか見られず、立ち会いをきっかけに不能になって「ラマーズ離婚」したとか、出産の生々しさに腰を抜かしそうになったという男がこれに入る。次に、女性を産む性として礼讃し、出産立会いの感動によって夫婦の絆を深め、妻を心理的に支え、手伝う「感動支援型」。最後に「共同取組型」。感受性の強いこのタイプの男性はシンボリックな意味で「男も産む」。自ら、産み、育てる世界に喜びを見出だすタイプだという。

男性も出産に立ち会い、育児に関わる時代になっている。「男の育児」は、頑張って自分を追い詰めてしまっているお母さんたちに、「男の育児を見てごらんなさい。あれでも赤ちゃんは十分に育つ」と、育児の手抜きを許容する創造力をかきたててくれる意味もあるという、なるほど。

日本の社会が大きく変わろうとしている今、その変化の方向が出産をめぐる様々な現象によく現れている、お産という特殊な領域に焦点を当てることによってかえって社会の変化が見えたという。

◆産まないこと〜避妊・中絶

これまで女性たちの中でもほとんど語られてこなかったのが避妊と中絶だろう。

一九九〇年、日本で行われた人口妊娠中絶は四五万六千七百九十七件。30代の女性が最も多く、ほとんどが既婚で、すでに子どもを産んだ女性だという。ある程度の性経験を持ち、避妊の知識もあるはずの既婚者層に中絶が多いということは、避妊の難しさを物語っているのだろう。

よく問題にされる10代の人口妊娠中絶は統計では全体の7・1パーセントに過ぎないが、他の年代に比べて中期中絶が圧倒的に多い。知識のないまま、妊娠していることすら気づかず、どう対処してよいか分からず悩んだまま……ということなのだろう。

中絶の正しい情報を知ること、また、最終月経がいつで、生理の周期はどれくらいかをきちんと把握しているかとか、病院ではどんなふうに問診や診察がされるのか、手術がどんなふうにされ、どんなことに注意が必要か、などをまとめたビデオが『**中絶1　からだ編　医療としての人口妊娠中絶**』（19分／91年／制作・販売ワーク・イン凹〇三ー三七八〇ー四四四六八／横浜市女性協会企画／監修佐々木静子・まつしま産婦人科小児科病院長／テキスト付）だ。

続編の『**中絶2　こころ編　わたしを生きるために**』（29分／89年）では、中絶を自分の意思で選んだ女性たちのメッセージと人口妊娠中絶をめぐる歴史的な状況や法律が紹介されている。

「最終的に決めるのは自分、たとえ妊娠してしまったとしても、相手にすがるためと

か、世間的に後ろめたいとか、そんな理由で自分を左右させてしまわないでほしい」というメッセージが印象的だった。中絶の体験をマイナスとして自分の中で抱え込んでしまっている人に、ぜひ見てほしい。

◆女性と自然は科学で分断されている

「科学の進歩が人類に幸福をもたらす」という神話がまことしやかに囁かれる生殖技術は、遠い世界のことだと思っていた。しかし、目覚ましく進む生殖技術の報道を見聞きするたび、女性が主体であるはずの出産の現場で進行するこの技術競争に、恐怖すら感じる。

現在行われている人工授精や体外受精などの不妊治療は女性にとって福音ではなく、むしろ女性を傷つけるものであると、すでに女性たち自身の声が告発している。**『不妊―今何が行われているのか』**（レーテ・クライン編／フィンレージの会訳／晶文社）

家畜の胚移植の技術と産業化が、ヒトの胚移植にまで進み、体外受精の技術は、受精卵を胎内に戻す前の胚を調べ、産まれてくる子どもの遺伝子を操作することができるまでになっている。

このような状況を分析し、生殖技術の開発競争の中で女性は子を産む機械、実験台でしかないことを明らかにしたのが**『マザーマシン―知られざる生殖の実態』**（ジーナコリア著／斎藤千香子訳／作品社）だ。

一生に一度か二度しか産まない子なら、より「良い」子をと望む、多分、誰の中にもある気持ちが、遺伝子操作を許してしまっているのではないか。中絶は女性にとって辛い選択だが、実験室では胚を選ぶだけの作業である。しかし、胚の改造は個々人を変えるだけでなく、将来の生殖細胞まで操作することなのだ。また、胚移植の進んだ家畜は、良質の乳を出す、肉質が良いといった一つの特性を追及したために、病気に対する抵抗力や、子育ての能力など、種の存続に関わる特性が欠けていくという。私たちがこれを許容していくなら、この行き着く先は誰にも予見できない。

この人の生命を脅かす研究が、女性や社会に与える影響について、科学者やフェミニスト、障害者の立場から検証したビデオが**『生命操作―完璧な赤ちゃんへの幻想』**（日本語吹替版／51分／92年／制作カナダ国立フィルム省／監督グウィン・ベーゼン／2万円／問合せ・申込み（有）ビデオドック〒〇七九七―七一―〇八一〇）だ。

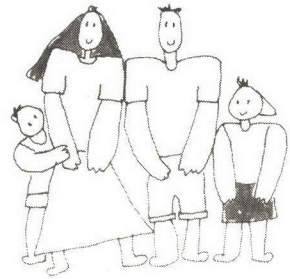
『優生操作の悪夢―医療による生と死の支配』（天笠啓祐著／社会評論社）でも、優生思想の歴史、臓器移植や生殖技術の現場で何が行われているか、現状や問題点が明らかにされている。

女性が産む産まないを決めているとは思えないこの現状を、私たち自身が検証する必要があるだろう。（中村泰子）

＊紹介した3本のビデオは横浜女性フォーラム（〒〇四五―八六二―五〇五六）フォーラム横浜（〒〇四五―二二四―二〇〇二）の情報ライブラリで見ることができます。

家　家族　家庭

井上輝子



一九七八年に「家・家族・家庭」の授業を開講してから15年。篠原さんと、色々な問題について繰り返し議論をしてきたが、全学的なカリキュラム改革を機に、この科目は昨年度を最後に終了となった。隔年開講とはいえ、随分長く続いたものだなあと思う。

講座を始めた年には、私はまだ30代で、4歳の娘と2歳の息子を抱えて育児の真っ最中。篠原さんの娘さん達もまだ小さく、保育園の給食のことや、3歳児神話などをめぐって議論したことを思い出す。自民党の家庭基盤充実政策や、『母原病』の本を槍玉に挙げたのは、1年目だったか、2年目だったか。一九八一年に篠原さんはアメリカに、私はメキシコに、偶然同じ年に1年間を外国で過ごすことになり、一九八二年に再開した時には、それぞれ異国での体験を語り合いながら、日本社会を論じたものだった。その後、昨年の一九九三年まで通算5～6回、2人の討論を軸に授業をやってきた。授業終了を機に、この間議論してきたテーマを私なりに整理しておきたい。

◆「女性が」か？　「男女共に」か？

女性の生き方や運動をめぐって、誰が決定や行為の主体であるべきだと考えるのか。女性学やフェミニズム運動のなかでしばしば議論されてきたこの問題は、篠原さんと私とが対立してきた主要な論点の1つでもあった。いうまでもなく、私はあくまでも「女性か主体であるべきだ」と主張し、篠原さんは「なぜ男女共にでないのだ」

と切り返し続けてきた。

例えば妊娠中絶の問題をめぐって、私が女性の自己決定権の立場から、国家による中絶の禁止に反対してきたのに対し、篠原さんは、中絶の是非が障害者を抹殺する思想につながる危険を指摘するとともに、自分の子どもを産むか産まないかという重要な問題に、どうして子どもの父たる男性を関与させないのか、と問うてきた。

私は、場合によっては、産まれつつある子どもの生きる権利と、すでにこの世で暮らしている女性の生きる権利とが、せめぎ合う（特に子どもに障害があった場合には、このせめぎ合いが鮮烈になる）ことを認めつつ、女性が自ら何らかの決断をすることを引き受けるべきだし、またその権利を保障されるべきだと主張してきた。「女性が」と強調するのは、国家や医療機関ではなく当事者である女性自身が決定すべきだということと同時に、夫や恋人やボーイフレンドの「産め」という圧力、あるいは「産むな」という圧力に、女性が屈することを恐れるからである。篠原さんの言うような、当事者である男女が十分話し合って、共同で決断していく関係は、確かに理想ではある。けれども、現実にある男女関係は、多くの場合男性主導型であり、女性は相手の意に添うように配慮し、自分自身の希望を意識的に、あるいは無意識の内に押さえ込むことが、多いのではないだろうか。

女性に関する研究や運動の担い手が第一義的には女性であるべきだ、ということについては、すでに私は色々なところで表明しているので、ここでは繰り返さないが、同様の論点である。

◆女性の社会進出をどう評価するか

篠原さんは、家庭における主婦の仕事や母親としての生き方に学ぶべきことが多いとして、最近の女性たちの脱主婦志向に懐疑的である。だが、私は「男が仕事で女が家庭」という性別役割分業が、現代社会の性差別の根源になっている点で、また職業活動には、「金を稼ぐ」という利点だけではなく、家族以外の色々な人たちとの交流や、自分自身の多様な能力の開発など、家事・育児に専念していてはなかなか得られない効用がある点で、女性も職業を持った方がいいと考える。また、今流行の中断再就職型の人生は、結局企業にとって都合が良いだけで、女性にとって損な選択だということで、学生には

できるだけ職業を継続するよう、薦めてきた。

篠原さんは、女性が専門職や管理職をめざすことにも、「上昇指向」「権力指向」の臭いがすると、しばしば批判を向けて来た。看護婦より医者のほうが価値があるわけでは決してないのだから、誰もが医者をめざすのではなく、「私は看護婦になりたい」という人が男にも女にもいてもいいのではないか。現業的な仕事にこだわりを持って従事し、管理職に就くのを拒否する人がいてもいいのではないか。というのが、篠原さんの主張である。

私も、そうした選択を否定するわけではないが、しかし、女性で医者をめざす人がいてもいいし、管理職になる人がいてもいいと思う。それだけではなく私は、医者や弁護士などの専門職に就く女性がこれまであまりにも少なすぎたため、女性のための医療や女性の立場に立った訴訟ができず、性差別が益々助長される結果になっていたことを考える時、むしろ積極的に女性が専門職に就くことが望ましいと考えている。管理職についても同様で、女性の管理職が増えることは、かつて男性によって独占されていた椅子に女性が座るようになることを意味するのではなく、椅子の向きや高さを変え、組織のあり方全体を変えていくことにつながると考えるので、ここでも進出を積極的に主張したいわけである。

管理職等への女性の進出は、単に男性優位の組織を隠蔽するためのアリバイにすぎないのか、それとも組織の原理を根底から変革する道程なのか。フェミニズム運動のなかで様々に議論されてきたこのテーマは、篠原さんと私が対立してきた論点でもあった。

◆家族のイメージ

篠原さんと私との間で、しばしば「お互いに違うねえ」と言い合ったのが、家族のイメージである。たとえば離婚について。私は、一組の男女が一度結婚したからといって、一生仲の良い夫婦関係が保てるとは限らないのだから、別れたくなったら別れた方が良いと考える。篠原さんも、一度結婚したら絶対に離婚すべきでないなどとは、もちろん言わないが、しかしどちらかといえば、離婚に対して慎重論であり、たとえ離婚したくてもできない人々、できない状況のことをいつも口にする。

老後についても同様で、私は「夫と二人の老後」も、「孫に囲まれた老後」も御免こうむって、気の合った女

同士でシニアハウスで暮らしたいと思っているが、篠原さんは、娘夫婦や孫と一緒に同じ屋根の下でにぎやかに、時にはケンカしつつ、「互いに迷惑をかけつつ」暮らすのが夢のようだ。

マスコミ等の描く、夫婦と未婚の子どもたちからなる「幸せな家族」像の流布に、違和感を持つ点では共通するものの、この核家族幻想をどう超えていくのか、その方向が逆を向いているようだ。個人の自立と自由を主張する私と、「縛り合う関係」の面白さを強調する篠原さんとでは、描く家族のイメージが全く異なるわけである。

以上見てきたように、篠原さんと私とで長年議論してきたテーマは、自由や平等といった、近代社会が生み出した価値をどう評価するのか、個人の自由と共同性の相剋をどう克服するのか、女と男のあるべき関係をどうイメージするのか等々、70年代以後の思想的課題でもあった。一方が絶対的に正しく他方が間違っているというよりは、どちらにも一理あり、どちらの立場を採るにせよ、別の側面をも認識しておく必要がある、といった類の議論であった。もちろん、二人とも相手の主張の正当性を認識しつつ、論点を明確化するために、互いに一面を誇張して論じ合った場合も多い。

長きにわたって、論争を続けて来られたのは、篠原さんと私の間に、基本的な信頼関係があったことが大きな理由であるが、また二人とも議論の勝ち負けではなく、議論のプロセスに意味があると考えていたことも、長続きの理由であった。だが近年、篠原さんと私の間では、議論がパターン化し、互いに相手の言いそうなことが予測できるようになり、マンネリ化の気配が見えてきた。

授業の開設当時には、社会人の受講者が多かったせいもあって、二人の議論に受講者が加わって、教室全体が論争の渦に巻き込まれる、ということがしばしばあった。だが最近ではそうしたことは少なく、教員同志が口角泡を飛ばして議論しているのを見ると、学生は黙って見物している、といった構図が目立ってきた。本誌で報告した昨年度のように、学生たちの固定的な性別役割分業観や家庭幻想に対して、篠原さんと私が共同戦線を張る、といった事態が生じてきた。論争を軸にした「家・家族・家庭」の授業は、幕の引き時のようである。

四人

野村康子
武田秀夫

私の勤務先では、不景気のため長い間、新人採用をしなかったので、世代構成にひどいアンバランスが生じています。本当に久しぶりに新卒採用された若者たちは、驚いたことでしょう。見渡せば「お父さん」「お母さん」がゴロゴロしているのですから。受け入れ側のオジサン族は、ギャルの入社に舞い上がっていますが、オバサンの立場は、複雑です。親切にすれば、「過保護だ」と非難され、知らん顔すれば「お局さまのイジメ」と陰口をいわれ、その距離のとり方には苦労が絶えません。

それにしても、熟練が評価される時代はよかったなあ……。校正のやり方さえ変わってしまった出版界では、ベテランが新人に教えることは皆無に近く、パソコン操作など、彼らに教えてもらうことの方が多いのです。

「え？　また忘れたの？　アルツじゃない？」

「アレとかコレとかいわないで固有名詞で言ってよ」

彼らは無邪気にそして正直に言っているのです。でも気力・体力の衰えを感じる日々には、笑いで切り返せません。地位も技術もないオバサンが職場で誇りを失わずに生き残っていく道はあるのでしょうか。（N・Y）

教員をやめた時に、私は、校正の仕事でもやりながらメシを食って行こうかとスクールに通った前科があるものですから、野村さんの手紙は冷汗三斗、首をすくめて読みました。

「独壇場」は本来「独擅場」の誤用である、などという話を講義で聞きながら、一方で、こうして得られる〃能力〃や〃熟練〃なるものは、生きるに忙しい世の人間のあずかり知らない知識を少数の人間が独り占めにし、それを小出しに、エラそうに人に売りつける、そうした小賢しい才覚の謂に他ならないと深く感得したことでした。

指導書片手にやる教師の仕事にしても似たようなもの。指導書なんか、市販されて、生徒だれでもが買えるようにすればいい。その上で、教師は何が出来るか――。

ワープロやらパソコンやら、大衆がだれでも使いこなせる新しい機器の普及によってつきくずされる〃独占〃や〃熟練〃は、過去という屑篭に叩きこまれるのが至当。その上で、なおも残るものがあるかどうか、それを考える方が、かえって旧人類の元気を生き延びさせることになると私は思います。（T・H）

冗語

木村　栄
津田正夫

「生き残る道はあるのでしょうか」などと書かれると、つい「中島らもの明るい悩み相談室」風に答えたくなってしまいますが、形は違っても「かつて来た道、いずれ行く道」の時間の法則は生きてます。私たちも、老いと格闘する先輩に同じ思いをさせてきたのでしょう。ならば愚痴を言わずに、先んずれば人を制す、の裏技を。

職場の地位は確かに衰えゆく体力の隠れ蓑になっているのかも知れません。女性だけが素手で若者と張り合わなければならないのは、昇格差別の残酷な一面ですよね。ですが、鎧の助けを借りずに中身で勝負するのが、長い差別の歴史を生き抜いてきた女の文化と力の伝統です。

体力や記憶力の衰えは成熟の証しと教え、単純技術は青い頭に任せて、半世紀生きて培った経験的知性と人間的魅力で圧倒すればよいではないですか。

肝心なのは、この機会に高齢化社会を生き抜くための障害を個性と認めて生き合うノーマライゼーションのノウハウを、彼我に叩き込んでおくことです。そうすれば、産業廃棄物たるオジサンを尻目に豊かな定年後の人生を一歩先んじることができる筈、ですよねえ。（K・S）

日本以外の国へ行って驚くことのひとつに、ひとりひとりの輪郭の鮮やかさというか、存在感の濃さということがあります。

とくにオバサンに圧倒されます。バザールで果物を売っているオバサン、場末のレストランで忍耐強く客をさばいているオバサン、有料トイレの前で鍵を握っているオバサン。この仕事は自分しかできない、といった風情でいずれも誇りたかく自信にみちて働いています。ヨーロッパの女性は本当に威風堂々です。

日本では一般職と総合職の差別が指摘され、僕もそうした差別はとても不当だと思い、娘には「総合職をめざせ」などと叱咤してきたのですが、アジアやヨーロッパで自分の仕事に対してのゆるぎない自信や誇りにみちたオバサンの姿に出会うと、私たちの一般職と総合職の意識差の実態とは何なのだろうと思ってしまいます。日本の職場というものが、人間のかたちを消してしまうものなのか、みずから保護色に変じたほうが楽なのか。一般職や、オジサンオバサンや、老人から生きることの誇りや存在感を奪ってしまうものの正体は何でしょう。（T・M）

ホスピス〝千夜一夜物語〟

森津 純子

その日はちょうど桜が満開で、町はどこもかしこも、ほんのりと薄桃色にお化粧を施したように輝いていた。そんな桜吹雪の舞い散る中、91歳のYさんは旅立っていった。

「本当に、Yさんらしい日に、旅立っていかれたなあ……」

そんな思いをめぐらせながら、私はYさんの旅立ちを見送った。

入院の日、Yさんは黒の留め袖をあでやかに着こなして、優しげな笑みをたたえた息子をお供に、さっそうと歩いてやってきた。

その90歳とは思えない、かくしゃくとした物腰に合わせて、ユーモア溢れる話っぷりに、私はびっくりするやら、楽しくなるやら。「まるで、昔の女学生さんが病院にタイムスリップしてきたのでは」という錯覚に陥ったものだった。

しかし、そんなある日、Yさんは吐血して倒れてしまった。

血を吐いたことにびっくりしたYさんは、少し朦朧とした意識の中でこう言った。

「とうとうお迎えがきたのかいなあ、なんまんだぶ、なんまんだぶ……ほんとに世話になったねえ……もうだめだ、もうだめだ」。

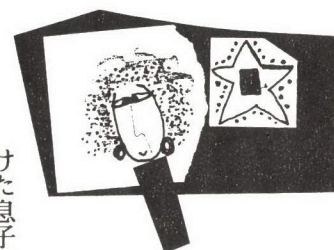
「Yさん、お迎えはまだだよ。仏様がこんな恐ろしげな形で、お迎えなさることなんてあるもんかね。大丈夫。私がちゃーんと怖くないよう、辛くないよう仏様のところまで連れていってやるっけ、安心していいんよ」。

「そんなら安心だ。わたしゃあんまりびっくりしたすけ、お迎えがきなすったんかと思ったよ。そうさね、仏様がそんなおそろしげなことする訳ねーらね」。

Yさんは安心したように眠りについた。

その後、Yさんはめっきり体力が弱り、寝たきりの生活となった。それでも、Yさんの笑顔は変わることはなく、いつでもその細い両腕をいっぱいに伸ばし、私の頬をペチペチと叩きながら言った。

「お・は・よ！！」
そして相変わらずお茶目な発言で私たちを笑わせてくれた。
「えー、お風呂にいれてもらうんは、いやらねー。いくら年とっても、私も女らっけ、痩せた裸を見せるんは、はずかしいらねーかー。もっとポチャポチャした裸らったら、いっくらでも見せてやるすけ」。
ある日のこと、Yさんは、「桜の花の下を、花魁の格好をした女の人たちが練り歩くお祭り」の写真を見ながら、「私の葬式らーね……」とにこにこ語っていたかと思うと、突然、「おらがやー　弥彦参りをしたればなぁー　あぁ　ヨシタナーヨシタナー」と、ベットの上で歌いながら踊り始めた。それは、地元の民謡「岩室甚句」で、以前から、Yさんがとても好きだった歌だと、私は後で知った。
そうして4日後、Yさんは私との約束どおり、静かに静かに息を引き取った。
「Yさん。仏様がようやっとお迎えにいらしったよ。ね、優しくお迎えに来てくんなさったでしょう？　きっと桜があんまりきれいだったから、仏様は『Yさんの踊りを満開の桜の下で見たい』と思って、今日、連れなさったんだね」。



そうして数日後、いつも穏やかな優しい笑顔でYさんを見守り続けた息子さんの、投書が新聞に載った。
「満開の桜並木を、生前好きだった『岩室甚句』を歌いながら、手っ甲に脚半をつけて、てくてく歩いて他界に旅立つ姿が目に浮かんでくる。
『罪とがを　背負いしままに救わるる　弥陀の本願ありがたきかな』
母のつたない辞世の歌である」。
私は目頭が熱くなり、文字が読めなくなった。

いのちを考える

八代市立第七中学校
弥富美枝

家庭科ゆうく遊わ惑

★はじめに

「いのちを考える」、「自分自身をみつめ、生き方を考える」この二つのことを目標に保育領域の学習を進める。三年間の家庭科学習のまとめでもあり、一番やりがいのあるところでもある。

自分をみつめるところから保育の学習を始める。私自身が、長い間、ありのままの自分を受け入れることができなかった。自分はこうあらねばという思いにとらわれ自分で自分を好きになれなかった。松井洋子さんの本『癒しのワークショップ』（太郎次郎社）と出会ってから、ありのままの自分を認められるようになって、のびのびと生き生きとすごせるようになった。

子どもたちを見ると、私以上に、小さなときから人と比較することでしか自分の存在を確認できない子どもたちがあまりに多い。自分は今何を感じ、これからどうしたいのか、それを考えるような場は、今の学校教育ではほとんどない。子どもたちにも本当の自分と出会って欲しい。そこから初めて自分のこれからを考えることができるのだと思う。

他の人に知って欲しい自分（性格、からだのこと、悩んでいること、つらいことなど）、自分の好きなところ嫌いなところ、心の変化、体の変化を書かせる。自分のことだから何となくわかったつもりでいるのに、言葉にすると難しく出てこない。「今まで自分のことをしっか

り見つめたことがない人もいると思うけど、自分が自分をどう感じているかよく探っていって見よう」。この時「自分」というものと初めて向かい合う子どももいる。

私自身の中学時代の悩み、自分の好きなところ嫌いなところを話していくと、「なーんだ、先生も自分と同じだ」という安心した顔をして聞いている。そして、自分のことを綴りだす。どうしても書けない子もいる。「これは、自分が自分のことを知るために書いてもらったものだから、私に読まれてもいいという人だけ出してね。コメントを書いて返します。出したくない人は出さなくてもいいからね。これをきっかけにこれから先の学習では、自分の気持ちや考えをじっくり探っていこうね。それが、自分を知ることにもつながるし、自分の生き方を考えるきっかけにもなるから」。

★いのちを阻むもの

その後、生命の誕生、生命をつくりだす体の仕組み、性交、妊娠、中絶、避妊の学習をする。そして、受精によって誕生した命、その生を阻むものについて学習していく。胎児に影響を与えるものは、子どもたちも結構知っている。「酒、タバコ、シンナー、薬……」自分たちの生活から危ないと思うものが次々と出てくる。それぞれの害を説明し、資料『母は枯葉剤を浴びた』（新潮文庫　中村梧郎著）を読む。戦争中のこととはいえ、一部の権力者によって行われた作戦が、ベトナムの人々に動物に植物に、米軍の兵士たちに、戦後十数年たった現在もものすごい影響を与えているということに、子どもたちは憤りを感じていた。昨年、枯葉剤の影響を受けた子どもたちのことを自分の目で確かめたくて、ベトナムのツーヅー病院を訪れた。そこで撮ってきた、枯葉剤被害を受けたホルマリンづけの胎児の写真をまわすと、食い入るように見ている。

しかし、これは遠い国の話ではない。日本にだって私たちのすぐ身近なところにも同じような問題がある。忘れてはならない、水俣病。豊かな自然に囲まれて、のどかな生活を送っていた人々にじわじわと襲いかかってきた有機水銀。水俣病の発生のメカニズムと症状、歴史を説明し、胎児性で最重症患者だった上村智子さんの資料『無言の告発二十一年「水俣病・授業実践のために」』（水俣・芦北公害研究サークル）を読む。これは智子さんが亡くなったときに書かれた追悼の文である。原因が

わかっていながら放置しておいた国に企業に「ずりい！」「きたなか！」と腹を立てる子どもたち。水俣病発生から四十年近く経った今でも、裁判が続いていると言うと、あちこちでため息が漏れる。「今までチッソをうらんできた。自分がこうなったのはチッソのせいだと思ってきた。チッソの正体を見てやろうと工場の中を見たら……そこで作られているのは、自分の生活に関係のあるものばかりだった。これが水俣病の正体や。自分らの便利で豊かな生活が水俣病を生んだんや」。水俣に行ったときに聞いた患者さんの話を紹介し、「国や企業が、いのちよりも利益を優先したのはもちろん一番悪いが、私たちも自分の生活を見つめ直す必要があるね」と語った。

枯葉剤にしても、水俣病にしても、一番大きな被害を受けるのがおなかの子どもたちである。私たちの生活を便利で豊かにしてきた化学物質、その結果、生を阻まれているいのちがたくさんあるのだ。また、人間の手によって作り出された様々な化学物質があふれている今の生活の中で、「障害」をもって生まれてくるいのちも少なくない。そのことを次に考えていく。

資料『生命かがやく日のために』（共同通信社　斎藤茂男編著）からとった文を読む。ダウン症に腸閉塞（手術をすれば助かる）を併発した新生児の両親が、手術をしないでほしいというところから話が始まる。そして、重い先天性四肢障害をもつ奈穂子とその両親の話、まわりの説得によるダウン症の赤ちゃんの両親の気持ちの変化などが描かれている。奈穂子ちゃんが生きる姿から親や周りの子どもたちが変わっていくところや、重い「障害」を持って死産で生まれた子どもと対面する若い夫婦の話を読んでいるうちに、「ぐすっ」「ぐすっ」と何人かすすり泣いている。「障害」をもっていても、その人間が全力を尽くして「生きる」姿に感動させられる。しかし、感想を見ると、「私にもし『障害』をもった赤ちゃんが生まれたら、この両親のように子どもが死ぬことを考えると思います」という感想がいくつかある。

そこで、次の質問をする。「おなかのなかの子どもに「障害」があるとわかったらどうするか？」。

どのクラスでもほぼ「産む」……一割、「堕ろす」……六割、「わからない」……三割である。

産む派、堕ろす派にそれぞれ理由を言わせ、黒板に書いていく。

〈産む〉
・いのちの大切さにかわりはないから。
・どんな子どもでも育てたいから。

〈堕ろす〉
・子どもの将来がかわいそうだから。
・生活するのに苦労する（子どもが）。
・育てるのに親が苦労する。
・結婚や就職が大変。
・いじめられる。
・親も子も変な目で見られる。

最初は「将来がかわいそう」と言っていた子どもたちも「じゃあ、どんなところがかわいそうなの？」と聞くと右のように具体的に理由を言う。意見が出なくなったところで、「今まで、みんなは十四、五年生きてきたよね。その十四、五年生きてきた中で見てきた日本の社会は、『障害』をもった人たちにとって、いじめられたり、変な目で見られたり、就職や結婚が大変だったり、生活するのに苦労したり、親が育てるのに苦労するような、そんな世の中なんだね」と言うと、ハッとした表情になる。「今日、学校の帰り道、トラックにはねられて足が動かなくなり、車椅子で生活しなければならなくなったとします。誰にでも可能性あるよね。学校で何が困る？」「トイレに行けない」「渡り廊下が渡れない」「階段が上れない」。

「それなら学校の外に出たら？」「歩道が狭くて車椅子が通れない」。

八代市の歩道は本当に狭くて人一人がやっと通れるぐらいの幅しかないところがたくさんあり、子どもたちもそれは実感しているようである。「みんなに出してもらったように、車椅子一つをとっても、困ることがたくさんあるね。耳が不自由だったら、目が不自由だったら……まだまだいろんなことが出てくるよね」。街にしても建物にしても元気に動ける人のことだけしか考えていないようなものがほとんどである。しかし、私たちも病気や老いによって元気に動けなくなるときがくる。また、いつ「障害」をもつかもわからない。誰にとっても自分の問題なのだ。

三年前に行った社会福祉の進んだデンマーク、スウェーデンの様子を紹介する。たった数日の滞在で、車椅子に乗った人を街のあちこちで見かけたこと（それだけ外に出やすい）、周りの人も変な目で見ることはなく、つまづいたりしそうなときは自然に手を貸していること、

建物も歩道も車椅子で移動できるように作られていること、自立を助けるための器具やヘルパーを自治体が負担してくれ、家族の負担が少ないことなどを話す。

「私の友達が結婚して1年後、かぜをひいてせきや頭痛がひどくなかなか直らないから、薬をずいぶん飲みました。それでも体調はよくならない。そのとき、彼女は自分では気づいていなかったけど妊娠していたんだよね。あとで妊娠がわかって、つわりがひどく体調が悪いままで、赤ちゃんの体ができる大事な時期に薬をたくさん飲んだという精神的なストレスもあって、ずいぶん悩んだ末、赤ちゃんを堕ろしてしまいました。子どもが欲しいと思っていたのに薬のことや妊娠のことを全然考えなかった自分がばかだった、って。私は彼女の話を聞いて何も言えなかった。中絶のところでも言ったけど、彼女が悩んだ末、自分の生き方としてそれを選んだのだから……。だから、産むか堕ろすかの選択はその場になってもとても難しいと思う。でも、もし日本の社会が、デンマークやスウェーデンのようであれば、「障害」を補ってくれるシステムがあれば、「堕ろす」と言う人はもっと減るんじゃないかな……」。

ダウン症の子どもが生まれて、最初はショックもあったと思うが、今はダウン症の子どもを持つ親の会にも参加し、仕事をしながら子育てもがんばっている大学の同級生、何度か遊びに行ったことはあるのに、伯父、伯母が私たちの前に連れてきてくれたことがなく、今まで一度もあったことのない脳性麻痺のいとこなど、私の身近にいる人達の話をしていく。身近な人の話は子どもたちも本当によく聞いている。

さらに、子どもたちが何度か交流で接している近くの養護学校の子どもたちの話をする。親御さんの思い、高校が遠く、定員も少ないこと、就職も厳しく、養護学校卒業後は、授産所に通うか、家にいるかという人が多いこと、高等部設置ができるよう保護者や先生たちで運動を進めていることを話す。子どもたちにとっては一番身近なことなので、この時の教室はしーんと静まりかえる。

その後、「こんな生き方をしている人もいるんだよ」といって雑誌『マナメッセ』に載っていた記事「真奈美が障害をもって生まれてきたのは、まわりの人々に〝愛〟を伝えるためだったのね」を見せる。真奈美ちゃんの母親美和子さんの「歩けない、喋れない。だからこ

そ、普通校に通わせたい。買い物、レストラン、コンサート。どこへでも連れて出た。出会い、ふれあいのなかで、生きることの意味を学んだ。真奈美がいたから、見返りを求めない本当の愛を知った」という生き方を紹介して、この時間は終わる。

次の時間、十年ほど前に放送されたドキュメント番組を見せる。「障害」をもった夫婦が三つ子を出産したところから、子どもが二歳になるころまでを取材したものである。このビデオは子どもたちにも最も好評なビデオで、互いに支え合いながら懸命に三つ子を育てている二人の姿に、自分の生きる姿勢や親の大変さを考えさせられるようだ。このあと、子どものこころとからだの発達、生活習慣、遊びについて中学生の今と比較しながら説明し、最後に、子どもをとりまく環境ということで家族、母性保護をとりあげ、保育の学習を終える。

★最後に

誰もが人間らしくいきいきと暮らせる世の中にしていきたいと私は考えている。これからどのような社会にしていくのか、自分がこの問題に直面したときどうしていくのか、そして今の自分には何ができるのか、それをこれから子どもたちが生きて行く中で考え続けて欲しい。そのために、保育では知識のほかにいのちをめぐる様々な考え方、いろいろな人の生き方を知らせたい。そうなると取り上げたいことはたくさんあるし、毎年力を入れるところが変わって行く。ここ二、三年は養護学校との交流をやっているせいか、養護学校の子どもたちを特別な人ととらえるのでなく、自分と何ら変わることはない、「障害」も他人事の問題ではないと子どもたちにとらえて欲しいと思うため、「障害」をとりまく状況についつい時間をかけてしまう。

今春、三年前に担任をした子どもたちが高校を卒業した。初めて男女共学で保育を教えた子どもたちだ。自分のクラスには特に思い入れがあり保育の授業も力が入った。保育の授業がどれだけ記憶に残っているかはわからないが、クラスの三分の一もの子どもたちが、看護婦や救急隊員、農業、教員といった、いのちにかかわる進路を選んでくれたのがうれしい。私もさらに自分と向き合いながら、子どもたちと一緒に、どう生きるか、今の自分に何ができるかを考えて行かなければ！

ンタルもできる。しかし、これらは「介護用品」と呼ばれ、介護する側の負担軽減を目的としたものが多い。介護される側にとって、時にこれらは過剰のケアにもなると気づく人は少ないのではないだろうか。膝が痛い→杖をどうぞ、歩けない→車椅子を、電動リクライニングベッドを、移動リフトを……と、単にあてがわれるのでは、活かせる機能も失わせてしまう恐れが強いのだ。介護することばかりに気がいって、肝心の高齢者自身の気持ちや生活自体を見過ごしてはいなかったか。

私が大学生のとき、特別老人養護施設へ実習に行ったのだが、随分悲しい思いをした。職員数不足からか、リハビリ時間は短かった。トイレより世話が楽なのか、おむつの人が多かった。食事は手早くスプーンで流し入れて終わり。「おばあちゃ～ん、だめよ～」「おじいちゃ～ん、あ～んして～」。こんな調子で大人に接したら、馬鹿にするなと怒られるに違いない。毎日繰り返されるこの光景に３日で腹が立った。

私が年老いて、体の機能がフル回転しなくなったとしても、自ら残る機能まで止めてもいいと考えるとは思えない。機械や道具の助けは必要であっても、食べて、寝て、排泄して……など自分で生活することは当たり前だと思える。だが、体の自由が効かないと、自分でするのがおっくうになったり、面倒になったりする人が多くなると聞く。その状態が続けば生活全般が「受け身」になってしまい、そのうち「介護される者」になってしまう。そこで必要になってくるのが、銀ちゃん便利堂にあるような自助のための補助具ではないだろうか。“介護する者と介護される者”という関係は、全面的な依存関係ではなく、“生活行動を援助（補助）する者と生活する者”であるという認識を深めたいものだと思った。（林）

※銀ちゃん便利堂　京都市北区寺之内通り七本松西入南側　075(464)6015

『老人が使いやすい道具案内』（晶文社）大変分かりやすく一気に読めます。お薦め！

家庭科玉手箱

……浅井由利子
林　咲子

今回は、京都西陣にある「銀ちゃん便利堂」；高齢者のための生活用品を扱う店に出かけた。車椅子、杖、風呂マット、シルバーカー、下着類、食品と、様々な商品が所狭しと置かれている。

見た目は大げさなものではないのに、大きな威力を発揮する道具たち。たとえば、寝たきりの人が起き上がれるようになったという、ベッドの横にとりつける移動用バーや、浴槽のふちの高さに合わせて置く腰かけでお風呂にらくらく入れる入浴台。

「なかなかりっぱな木の椅子」と思ったら座面がパカッとあいて、なんとこれがトイレ！　よく売っているポータブルトイレは安定が悪く、足腰が弱くなったお年寄りには使いにくいらしい。すでに買ってしまったという場合はトイレフレームがあれば大丈夫。

プラスチック製の「もしもしフォン」。おもちゃみたいだけど、普通に話すだけで、よく聞こえる。また、助聴器という小さいマイクのようなものを耳にあてると、話し声がびっくりするほどよく聞こえる。

気に入ったのはくつ。「くつをはいてる」という感じがまるでしない。伸縮性のある布地でつくられた靴下感覚のくつ。一足買いました。そして、松葉杖だって、スマートでオシャレで使いやすい！　今の私にとっても使いやすい道具がいっぱいありました。

きわめつけは、パンツ!!　一番目立つところに、何種類も展示してある。女性用、男性用というだけでなく、その人の状態に合わせて、いろいろな工夫がしてある。こういうのがあるのなら、将来年をとって多少失禁があっても家に閉じこもらず、どんどん外へ出て行けるョ。（浅井）

私の住まいの近所にも、これらに近い商品を扱う店はある。また、レ

共学家庭科の窓

石川尚子

四、コンピュータ利用の家庭科教育

（1）家庭科とコンピュータ

一九八九年の学習指導要領告示によって、中学校「技術・家庭科」に選択領域の「情報基礎」が設けられ、高等学校の新設科目「生活技術」「生活一般」に学習内容として「家庭生活と情報」が入り、職業に関する科目に「家庭情報処理」が導入された。同年の教員免許法改正ではそうしたコンピュータ教育の重視を受けて情報科目が必修になり、私たちは否応なく、情報教育、言いかえればコンピュータ教育の包囲網に取り込まれている。

学校の一角に突然コンピュータのディスプレイがずらりと並び、ある意味で不気味な光景が出現した時の不安感は、おそらく私ひとりのものではなかったはずである。

しかし、生徒たちが何の抵抗もなくコンピュータを使い、職員室にも研究室にも何台かが置かれるようになって、今では珍しいものでも恐ろしいものでもなくなった。

だがやはり、学習内容にこの分野が導入されることには今でも疑問を持っている。それは、コンピュータはあくまでもＶＴＲやＯＨＰと同様、学習効果をあげるためのひとつの道具にすぎないと思うからである。

（2）コンピュータ利用で学習効果があがるもの

それでは、コンピュータを用いることによって学習効果があがるものとは何か。また、効果をあげにくいものとは何であろうか。私は次のように考えている。

Ｉ、学習効果が期待できるもの

①多くのデータを必要とするもの

②必要なデータを検討することによって問題解決のプロセスが得られるもの

③複雑で時間のかかる計算が必要なもの

④シミュレーション化、グラフ化、カラー表示などの方が理解しやすいもの

⑤答えが明確なため、段階的に教えることができるもの

II、学習効果をあげにくいもの

①実物で示した方が理解しやすいもの

②実際に体験することによってはじめて、喜びや満足が得られるもの

③人間の暮らしそのもの、個人の価値観に左右されるものなど、人間的要素が豊かなもの

④答えが幾通りもあり、多様な対応が必要となるもの

⑤視覚、嗅覚、聴覚、触覚、温冷覚など、感覚に訴える部分が大きいもの

こうしてみると、従来家庭科で取り入れてきた様々な実物教育や感覚教育は、コンピュータ教育ではカバーしきれない家庭科の特徴ある指導法だったことをあらためて認識できる。一方、家計簿実習や栄養計算のように膨大な時間を要する教材には、考える時間を確保する意味でもコンピュータ利用は有効であろう。それこそ、指導の道具としてコンピュータを使いこなしたいものである。

しかし、市販されている家庭科関係のソフトは他教科に比べて極めて少ない。今後本当にいいものが開発されることを期待しつつ、授業に利用できると思われるものを参考までにあげる。また、新しい情報をお待ちします。

家庭で使用できる市販パソコンソフト

ソフト名，対応機種	特　　色	連　絡　先	価格(円)
ﾊﾟｰｿﾅﾙﾍﾙｽﾒｲｸ(NEC)（富士通FMR）	栄養，運動，休養の3要素からの生活総合判定をし，健康づくりを進めるﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ。ｽｸｰﾙﾊﾟｯｸ割引や教師用システムあり。	ﾍﾙｽﾒｲｸｼｽﾃﾑ研究所Tel. 045 324 1494 FAX 045 324 5760	Ver. 3.0 年契用 22,000
MENU PLAN（NEC 9801，富士通FMR）	複雑な栄養価計算の簡略化，豊富な調理品・献立のﾃﾞｰﾀにより，調理の経験不足を補い，家庭での実践に拡大できる。	ｽﾀｯﾌｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙ(株) Tel. 03-3719 0331	58,000
中学校技術家庭科 栄養計算ソフト HEALTHY II	中学対応の10群と高校対応の4群を選択できる。献立作成，栄養計算，レーダーチャート，食品群別棒グラフ，PFCバランス可能。	東京書籍(株) ソフトウェア事業部 Tel. 03-3942 4100	12,800 追加 5,000
ハイ・ヘルシー（NEC，Epson）	各人の栄養所要量計算ができ，各人単位の正確な栄養診断が可能。3通りの献立入力と簡単な栄養計算，カラフルなグラフ表示など授業で使いやすい工夫がしてある。	教育図書(株) Tel. 03-3268-5141	単価用 24,000 年契用 4,800 (10セット以上)
ホーム・エコノミカ（NEC，Epson）	フロー（日々の収支）とストック（資産・負債状況）が同時に管理できる家計簿ソフト。少ないデータでも家計管理の基本が学べるので授業で使いやすい。		単価用 24,000 年契用 5,800
BASIC－4（NEC，Epson，東芝）	四群点数法を覚えながら栄養計算を簡単にする合理的な食品ｺｰﾄﾞ。入力した料理の保存，呼び出し，追加，削除が可能。	女子栄養大学出版部営業課PD係 Tel. 03 3918 5411	15,450
Sports and Diet（NEC，Epson）	毎日の食事，運動，体重，血圧の記録から健康をﾁｪｯｸ。体重の管理には目標体重と目標期間を設定して食事を診断する。	女子栄養大学出版部営業課PD係 Tel. 03 3918 5411	45,000
パソコン栄養診断（NEC）	最終目的を食事の栄養診断に設定した中学・高校家庭科用ソフト	女子栄養大学出版部営業課PD係	5,150
パソコンによる日常着の製作	採寸，ﾃﾞｻｲﾝの考案，色彩の基礎，型紙の製作が可能。製図した型紙はﾌﾟﾛｯﾀｰで出力できる。ｺﾋﾟｰﾃﾞｨｽｸは(5枚)10,000円	一橋出版株式会社 Tel. 03 3392-6021	ﾏｽﾀｰﾃﾞｨｽｸ(5枚組) 70,000
ｽｰﾊﾟｰ家計簿Ver. 3（NEC 98用）	項目の設定は費目と内訳に分類され，ともに集計できる。ｷｬｯｼｭﾚｽ管理が容易にでき，家計簿記の学習に使いやすい。	株式会社 田中ソフト	10,000
家計簿てきぱきマム(NEC)	毎日の入出金の入力により現金出納ができ，予算設定すれば家計診断も可能。預貯金管理，年間現金出納もできる。	ﾃｸﾆｶﾙｿﾌﾄ株式会社 Tel. 03-3564-6599 問い合わせは，NEC	9,800
家計簿（富士通，NEC）	予算と支出の比較を毎日の記帳時に行うことができ，収支決算を棒グラフ表示。	(株)IBC Tel. 0985-27-4326	20,000
家庭科住居領域簡易CAD 配色ソフト	財団法人学習ソフトウェア情報研究センターの事業の一環として，全国の先生方が開発した学習ソフトを教育実践用として提供している。技術・家庭科のソフトはここにあげた程度で非常に少ないが，所定の手続きをし，所定の負担額を支払うことによって入手できる。	(財)学習ソフトウェア情報研究センター Tel. 03 3464-1980 FAX. 03 3464-2302	ｿﾌﾄ1本 3,500 5本以上の場合は1本 3,000
簡単な栄養計算，栄養価計算ソフト，献立分析，私の食事診断			

（『新しい家庭科教育』教育図書より）

この世はパラドックス

鈴木真理

あるミニコミ紙で、弁護士の福島瑞穂さんが、日常生活の中でうっかりすると見過ごしてしまいそうなパラドックスの数々を、〝逆説標語〟として紹介していた。例えば、「夫婦仲のいい国ほど離婚率が高い（結婚に対する期待値が高いから）」「〝老人〟の政治家が多い国ほど福祉が充実していない」「戦争のための法律を平和協力法という」など、なかなか言い得て妙でおもしろい。「読者の方も作ってみてください」とあったので、早速トライしてみた。

「〝女房を養うことが男の沽券（こけん）、女が働くなんてとんでもない〟と言う男ほど、経済的に自立していない」　↓稼いだお金はみんな妻に持っていかれ、雀の涙ほどの小遣いをもらうだけ。給料の銀行振込が一般化しつつある状況では、ヘソクリもままならない。仕方なく、「今月は付き合いがいろいろあって……」云々と、情けない声で小遣いをねだる。自分の自由になるお金もなくて、何が〝男のコケン〟なのだろう

「弁当を一度も作ったことのない人ほど、愛情弁当論を説く」　↓福島さんが挙げていた「家族を大切にしなかった男性政治家ほど、老後は家族で面倒を見るべきだと言う」のバリエーションかもしれない。私の職場でもひところ、給食廃止をめぐる話題がよく出てきた。「給食は教育ではなく福祉だ。でもカアちゃんたちにしてみれば、福祉の世話になっているなんて認めたくもないだろう」と言っていた男性管理職もいたが、私が思うのはただ一つ。どこかの町の町長も含めて、給食に疑問を感じる人は、自分の子や孫のために、毎日実際に弁当を作ってみればいい。限られた予算と材料で、栄養のバランスを考え、か

わがままなまま 私のまんま

つ見た目も美しい〝愛情弁当〟をである。前夜の酒が残っていようが、残業が続いていようが、そんなことは子どもたちには関係ない。もちろん、遠足や運動会にはスペシャル・メニューを工夫しなければならないこともお忘れなく。

「税金をたくさん納めている人ほど、多額の保育料を支払わねばならない」

↓保育料は、他の福祉サービスの代金と同じく、所得に応じて増えるしくみになっている。夫婦二人とも税金を払っていれば、その分安くしてもらえるのかと思っていたら、逆なのだ。一方、学童保育の公設運営に反対するオジサマたちは、「一部の共働き家庭のために税金を使うのはけしからん」と唱えているようだが、ダブルインカムが二人分の税金を払っている（何ら税制上の優遇措置は受けられないのに……）ことは、なぜかいつも忘れられている。

「物事を決めるのは当事者ではない」　↓自分でゴミを出したこともない人たちが、ゴミ袋は半透明にしようと決める。住民に何の相談もなく、そこに空港をつくろうと決める。福祉、教育、住宅政策などにおいてもしかり。

「エコロジストは自然のバランスをくずす恐れがある」　↓ある動物をひたすら守ることで、かえって生態系を壊す結果になることもある。木を切ることで生活を立てている人々の収入を保障することなしに、熱帯雨林の保護はあり得ない。理想を言うだけでは何も解決しない。

「不倫は純愛である」　↓〝不倫ブーム〟の後に〝純愛ブーム〟なるものが騒がれたことがあったが、真の純愛とは、相手の年齢、性別、財産、配偶関係などとは無関係に湧き起こる感情のことなのではないだろうか。

きき夏ずきんの森から

文。井内好子
絵。中畝治子

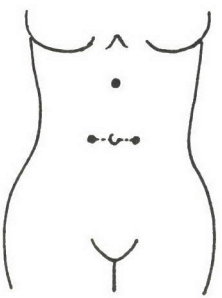
夏。すべて勢い盛んに繁る時。人の体の気もいっぱいに外に向かって発散したがっている時です。できるだけ野外に出て、山に海にスポーツに歌、踊りにと、おおらかに楽しむことがそのまま夏の養生となります。早く起きて、汗かいて。自分の呼吸に合わせて適度に体を動かし気を発散させてあげることが、次の季節の変化に対応できる体につながります。夏は自然界に陽気があふれているので、少々陽気をもらしてもよいのです。

町のあちこちに強すぎるほどのクーラーがうなってきたのはいつの頃からだったでしょうか。運動や風呂上がりの直後にクーラーや扇風機にあたると、開ききっている隙間から冷気が忍び入ります。これが風邪や血圧の急上昇のもと。特に体力の落ちている時は気をつけましょう。また長時間の冷房で、全身のだるさ、手足の冷えなどを訴える人も多くなりました。「腎兪」「至室」「大腸兪」「中脘」「天枢」にお灸をしてみて下さい。

もう一つ気をつけたいのは冷たい飲食物。夏は体の表面の方は「気」が多くなっていますが、中の胃腸は温める働きをする気が少なくなっています。口あたりのよい麦茶、素麺、生野菜ばかり取ると胃腸に負担がかかって荒れてしまい、下痢や発熱、腹痛等を起こします。主食には精製していない穀類を、副食には根葉の煮物などもメニューに加えましょう。「夏の病は口から入る」と言います。「中脘」「天枢」「足の三里」にお灸をして下さい。夏風邪もほとんどが胃腸を冷やしたことが原因です。冬の風邪とは違いますので、前の冬の残った風邪薬を飲むのでなく、おなかを温めて汗をかかせてあげて下さい。生姜

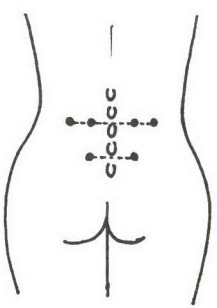
や梅干湯もいいでしょう。

最後にお伝えしたい楽しい話。気功の会のKさんは、毎年何人かの友だちと連れだって「海砂浴」をするそうです。ビーチパラソルを立て、各々自分の穴を掘って横たわり、順に次の人が砂をかぶせてあげます。最後の人は片半分をタオルで間に合わせて長い時間を過ごします。そうすると体が軽くなって、思いっきりすっきりするそうです。樹や石とまた違った瞑想のひととき。想像するだけでワクワクしてしまいます。土が毒素を吸収してくれる話はよく聞きますが、海の塩まで入っているんですもの、皮膚のトラブルのある人にもよさそう。海水が十分温まった頃に是非やってみたいな。それも満月の日に。



中脘
みぞおち（剣状突起）と臍との中間

天枢
臍の左右２寸



志室
第２，第３腰椎棘突起の間から水平に外方へ指４本のところ

腎兪
第2・3腰椎の間で左右1.5寸

大腸兪
第4・5腰椎の間で左右1.5寸

連載…第12回

木を植えた日

―実質的夫婦関係

蒔田直子
カット／古村美加

流れるものがなくなったのーという名セリフを残して二十年来の結婚をやめたミッちゃんを皮切りに、ここ二、三年の間に友人たちがあれよあれよと離婚した。――何の経済力もないしな、40歳ってイチからやり直すに最後のチャンス。あと5年今みたいなんを続けてたら心底萎えてしまうし。――私ね、自分の残り時間があと十年だと思ったら、ああこれからはあの人とかかわりたくない、もうそれだけ。後へはひけないわね。――40歳でも70歳でも別れの主導権を握った女は妙に説得力があってエネルギーに満ち、うつうつと疲れていた数年前とは別人になっている。女友だちで集まると、離婚組が多数派なので、男っていらんワ、なんであんたらまだ一緒にいるの？　という話になる。大騒ぎで盛り上がっていた時、隣の部屋で遊んでいた子どもたちの会話が聞こえてきた。「そういえばアッくんとこもとうちゃんいないね」「うん、ボクんちのとうちゃんはヘビになってどこかへ行っちゃった」……みんな顔を見合わせて一瞬シーンとする。別れた父ちゃんと子どもとのことは、これから始まる手探りの未踏の地だ。たまたま男ひとりまぎれこんでいたパクさんが、うーん、男のことを少し言うとね、と発言したとたん、「パクさんは発言権なし。なおちゃんと日常性を共にしていない。いいとこどりはダメ」と鋭い指摘。確かにうちは数年来通い婚が定着している。パクさんは大阪で中学校の教師をしている。朝鮮学校ですかとよく聞かれるが、日本の公立中学で、「在日の子どもたちに民族教育を」と運動をガンガンやっているから帰ってくるヒマがない。気性の激しい人で、私以上にいつも怒っているから最近は怒るとアトピーが出るという極限状態に達した。どこだって状況は悪い。憤死するかもと心配になる。私たちは火に油で、どちらかが怒ると片方が煽るから、からだによくない。パクさんは土曜の夕方帰ってくる。わあっ、うちの中に男がいる！　と新鮮ではある。パクさんが帰って来るとソレッとばかりに私が出ていく。パクさんがいない夜も、頼むねっと言って出ていく。子どもたちはこの家は自分たちで守ると思っている。ヘビになって

どこかへ行っちゃった父ちゃん、母ちゃんである。うちは家族で三様に国籍が違う。名前も違うし、〝同居〟しているふうでもない。みんなが揃うと非日常のハレの日になってしまう。試行錯誤の数年を経て、子どもたちが生活の自立を果たすようになり、こういう形に落ち着いた。

結婚も、家族も、ひとも根っこのところで揺らいでいるのだと思う。ＡＰＴの電話相談でもここ半年ほど離婚の相談に追われている。電話してくるのはフィリピンとタイの女性が多い。彼女たちの話を聞いていると、揺らいでいるそのままを、しんどいながらも自分自身の力で引き受けられるのは日本人だけの特権か、と思えてくる。日本人と結婚して「配偶者ビザ」で滞在する外国人は定期的に出入国管理局から「正しい結婚かどうか」、そのマジメ度を審査される。ビザの更新は6か月、1年、3年の三種類。入管が決定し、異議申し立てはできない。「国際結婚を考える会」の友人たちの間では、アジア系なら6か月、欧米系は一発で1年か3年などと言われている。京都の入管事務所に話し合いに行った時、所長さんは言った。――「マジメな結婚」の条件は、まず同居、収入、日本人の方の親の心証、子どもの有無。これらを総合して私どもが判断し、ビザ更新を行います。……ああ、そうなるとうちなんか偽装結婚だ。入管では愛の写真集のような写真を出させたり、なぜ子どもがいないのかと日本人の方の親に電話してきたり、近所に聞き込みにくることすらある。でも、所長さんに本当に言いたかったのはこのひとこと、「あんたの結婚の中身はどうやねん」。

配偶者ビザ更新のたび、相手の日本人が「実質的夫婦関係」があることを証明する署名と、同意を表さなければならない。5月末、タイ人の女性が怒りに震えてやってきた。夫は他の女性と中良くなり、家を出てしまった。そしてこの署名を拒否。「同居」もしていないというので、入管が彼女の配偶者ビザを打ち切ったのだ。訴えます、とタイ人の女性は言った。夫を？　ちがう。「入管を訴えます。離婚していないのに男の言うままに私を追い払おうとした」。そんなこと、できるだろうか。へんに事情通になってすれてしまったいるところがこちら側にはある。とにかく彼女はオーバーステイになってしまう。弁護士と相談して、夫と入管と両方を相手に裁判することになった。二日後、入管に出向いて裁判に提訴中の三か月のビザを取ってきた。目からウロコが落ちるとはこのこと、当

事者は本質をついている。裁判に勝てば関西では初のケースになる。

日本海に面した港町のフィリピン人女性。夫は借金をかかえて酒びたり、彼女に暴力を振るう。8歳になる子どももいる。スナックで稼いでくるのも子どもを育てるのも彼女一人の肩にかかっているのに、夫の両親が「おまえが悪い」と責めたてる。一日ももたない、とAPTに電話してきた時、腎臓を患い、精神的にも限界を越えているようだった。治療が必要だとすぐわかったが、保険がなかった。腎臓の治療が優先順位の一番。メンバーの一人が医療関係者の協力を得て、列車で2時間のその町へ向かった。ひとが生きていくのだから、家族のこと、仕事のこと、医療のこと、すべて抱えてしまう。この人が夫と別れて日本国籍の子どもとここで暮らすには、「親権」を獲得しなければならない。今のところ親権を取らずに〝定住者〟というビザを獲得するのはとても難しい。日本人と何らかの法的な関係が切れれば追放されてしまう。フィリピンには日本人の父親が養育を放棄した子どもたちが一万人以上いるという。婚姻外の子どもには日本国籍がない。子どもと一緒に追放された女性たちの救援グループ「バティス」のメンバーが、父親探しという気の遠くなるような課題を抱えて来日した。責任の追及より何より、子どもたちが人生の始まりに父親から捨てられたという事実を回復するために来たのです――バティスのヌクイさんから私たちへのメッセージである。

電話相談に参加して一年。見えてきたのは「外国人労働者問題」ではなく、荒涼と荒んだ日本の風景。いったい日本の男はどうなっちゃってるの！　そういう男と顔つき合わせる日本の女はどうだろうか。ガタガタになったアキレス腱のような部分にアジアから来た女性たちがくさびのように打ち込まれている。彼女たちは、いらなくなったら追い払える安全弁ではない。

★お知らせ　京都で在日朝鮮人教育に取り組んでいる教師グループが企画した『在日のいま―京都発―PART Ⅱ』ができました。高校生から一世のハルモニまで執筆者はすべて女性。学校の中でのキムチ作り、遊びなど楽しい実践もどっさり。蒔田の国際結婚について言いたい放題のコーナーもあります。申込先　京都市中京区烏丸丸太町西入ルNHKビル4F全朝教京都〒六〇四郵送ご希望の方は一二四〇円（送料込）を郵便振替口座（〇一〇五〇―八―七九八九五）にお振込み下さい。

先日、全校一斉に持ち物検査を行いました。いわゆる抜き打ちという形で実施するのは、私が来てからはじめてのことです。校内での喫煙などが後をたたないため苦肉の策です。

高校生がタバコを持っているのはおかしなことですから、指導するのは当然なのですが、持ち物検査となると、タバコに限らずかなりのものが校則違反となるのです。雑誌、CD、お菓子、缶ジュース、化粧品、アクセサリー……。学業に関係ないもの、つまり学用品以外は持ってくるなということになっています。

私のクラスでも、前述したようなものが次々と出てきます。中には、花火や家庭用電話機まで出てきました。多かったのは制汗スプレーと日焼け止めクリームです。その日は体育の授業がある日で、生徒からの不満が出ました。

「先生、ファンデはわかるよ、でも日焼け止めがどうしてダメなの?」

担任も生徒指導担当でありながら、どうしてダメなのかよくわからないで指導しているのですから、明確に答えられません。今時の高校生には当たり前なのだろうと思い、すぐ返すつもりでしたが、一部のクラスだけ返すわけにいかない学校全体の状況がありました。

学校の「きまり」は時代錯誤であったり、こどもの権利を無視したりと批判を受けます。もっと柔軟に対応したいと感じていますが、こう考えるゆとりが最近学校にありません。ここ数週間、連日トラブル続きで「非常事態」に近い状況です。そのための会議が頻繁に続いています。

私のクラスは、相変わらず調子はよくほどほどの勉強をし、学校祭に向けて、積極的に取り組みつつあるのですが……。

教員になって授業成立が第一であった一、二年目。担任を持ってクラスだけを見ていた三年目。四年目の今は、クラスや授業だけできていればよいわけではないと感じています。

居場所考④　女の居場所　3

……水田宗子

六月の数日をハーヴァード大学のあるケンブリッジで過ごした。ハーヴァードは入学の日と卒業の日だけが美しい、とよく云われるが、初夏の澄んだ青空の下の街角に立つと、チャールス河を渡って吹いてくる風が、ふと風景画の中にたたずんでいるような錯覚を覚えさせる、ニューイングランド特有のさわやかさだった。河の向こうには、ボストンのスカイスクレパーが立ち並んで見える。チャールス河で隔てられるボストンとケンブリッジの間は、エマソンやソローやヘンリー・ジェイムスが馬車で行き来しても埋まらずに、ますます広がっていく溝だった。

そのボストンも、商業活動の中心をニューヨークに譲り渡して、二十世紀に入るとすっかり時代から取り残された文化＝観光都市になってしまった。私が留学した一九六〇年代の初め、ボストンをはじめニューイングランドの全体がすっかり疲弊していた。ある保険会社がボストンの中心街に大きな本社ビルを建て、それが初めての本格的な現代建築で、ボストンの経済復興を図るものだと、話題を呼んでいたような有様だった。

河のケンブリッジ側からボストンを眺めていると、ボストンは自殺した詩人たちの街だ、と

いう実感が湧いてくる。シルヴィア・プラスやアン・セックストン、そしてロバート・ロウエル……と、告白詩といわれた自己の内面をテーマとした詩を書き、欲望や恐怖に彩られた潜在意識の深層へ分け入って、そこで狂気や死に行き当たることを躊躇しなかった詩人たち。第二次世界大戦後の経済的繁栄の絶頂にあった大国アメリカの一九五〇年代に、地盤沈下した保守的な文化都市ボストンで詩を書き始めたプラスやセックストンが、ボストンからも、アメリカからも、そして女性からも逃走しながら、しかも〈女性詩〉という未踏の領域への道筋を残していったことが、涼しい風の吹き通ってゆくこちら側から考えると、よくわかるような気がする。

だが、河を渡って、ボストンの街中に入っていくと、そのような認識や感じはなくなってしまう。街には花が咲き乱れ、マーケットは商品で埋まり、買物客で賑わい、バスやタクシーやトラックがせわしなくせまい道路を走る、そこは喧噪と華やぎに満ちた都市である。振り返ると、大学や教会の尖塔が立ち並ぶひっそりとした河向こうは、まるで一枚の風景画のように思える。その風景画の中からこちらを見ている小さな人物は、自殺した女性詩人なのか、私なのか。

学問や文化の伝統継承の場であり、新しい思想の実験の場でもある、大学という場所に居場所を見つけることのできなかった、書く女性としてのプラスやセックストン。といって、河向こうの商業都市では、彼女たちの詩を〈ごみ〉みたいなものだと云い、結婚や出産や家事の中で自分が見えないと落ち込む彼女たちをヒステリーだとして病院に送り込む男たち（恋人や夫）が、もっと世の中の役に立つ日常の仕事に、モーレツに打ち込んでいる。

シルヴィア・プラスは大学では優秀な学生だったが、オールAの成績を男子学生や教師の前では隠すという優等生だった。詩を書き、論文を書くだけではなく、家事や育児もきちんとで

きる女であることを世間に証明しようとして、かえって〈三重脅威の女性〉と云われ敬遠された。彼女の書く詩は、批評家からは、学識がありすぎてイメージが固く、難解と云われ、学者からは、赤裸々な感情や怨念の吐露がおどろおどろしくて、個人を超えた普遍的な美の基準に適わないと批判された。

セックストンは主婦だった。出産を機にうつ病になり、治療の一端として詩を書くようにすすめられたのだが、自分の感情と正直に向かい合おうとするその詩は、タブーとされてきた女性の〈性〉をテーマとする作品を含めて、主婦のヒステリカルな叫びだとして、長く批評家たちから蔑視されたり無視されたりした。

イギリスの伝統にあやかったレガッタで有名なチャールス河は、一年に一度、その日に数十万の人出の賑わいを持つほかは、悠々とおおらかに曲がりながら、二つの街の間をボストン湾に流れ込んで行く。その河は、女性詩人にとっては、渡るにも帰るにも、奈落へと引きずり込まれる深い淵であった。アメリカ現代女性詩の始まりといってもよい、セックストンの『精神病院へ、そしてそこからの帰り道』や、プラスの『エアリアル』は、この奈落へつながる深い淵への転落と、そしてそこからの帰還の道が、ボストンにもケンブリッジにも住めない彼女たちの書く場所であり、居場所であったことを示している。

奈落の底を知っている　と女は云う――わたしの大きな根で触れて知っている
あなたが恐れるのはそれだ
私は恐れない――そこに行ってきたのだから

（「楡の木」・『エアリアル』より）

MEN'S GUIDE

家庭科転職情報
《男性編》

南野忠晴

4月24日日曜日、棚から漬物石が落ちてきて足の甲の骨を一本ばかり折ってしまった。3年選択食物の調理実習が間近に迫り、7クラス持っている1年生もいよいよこれからという時に、僕は松葉づえをつきながら自分のこともままならない状態となった。

翌、月曜日は休んでギプスを巻いてもらい、火曜日は電車とタクシーで学校へ行った。正直言って、松葉づえがあんなに大変なものだとは夢にも思わなかった。階段は怖い、人込みは怖い、電車の乗り降りは怖い、電車が揺れるのも怖い。その上、全体重を支えているのが主に両手の親指の付け根と肩とあって、親指と肩は5分も歩かない内に泣きたくなる程しびれてくるし、手の皮はむけて血がにじんでくるしで、学校に着いたときにはもう疲労困憊していた。実はこの日はつれあいに付き添ってもらってこれだから、この先どうなることかと考えると目の前が真っ暗になった。

次の日から通勤はタクシーに切り替えた。しかし、体が思うに任せないのは同じだ。教科書、ノート、プリントをリュックに詰めて、松葉づえで教室、調理室をヒョコヒョコ移動する日々が始まった。でも、始まってみると何とかなるものだ。みんなが色々助けてくれる。がんばって自分の力で何でもしなくちゃと、いつの間にか気負っていた心がふっと緩んで、有り難く人の助けに甘んじることを覚えた。そして、生徒たちにも、むやみと自立を求めるのではなく、助け合える人間関係を作っていくことの大切さを伝えたいと強烈に思うようになった。

新聞社の取材もテレビ局の取材も引き受けてしまっていたので、少し遅らせてはもらったが、ギプスを着けての調理実習の取材となった。ありのままを見せればいいや、と開き直れたのは棚から落ちてきた漬物石のお陰かもしれない。漬物石を棚に置くなんて、とお笑いめさるな。棚から落ちる漬物石にも以上のような効用がある。もっとも、もう棚に置いてはいませんが。

weの屋台村

「悪魔ちゃん」問題について（到着順）

◇印は、いいと思う

◆印は、よくないと思う

☆印は、どちらともいえない

◇「親が目立ちたいんだろう」と嘲笑する人が多数いるらしいが、目立ちたくて、何が悪い！自己顕示欲は、あって当たり前。悪魔ちゃんを産んだ本人（二人）が、「悪魔」と名づけようが「天使」と名づけようが、本人（二人）の自由！

「悪魔ちゃんという名前だから、いじめられっ子になるだろう。子供がかわいそうだ」などとほざくヤツもいるが、「いじめ」は、「いじめる側」がわるいんですよ！

行政に氏名を変更させる権利はない！

（高橋七重・東京・三〇代）

☆最終的には、役所が干渉するのはおかしいと思いましたが、親の自由に対しても、子供に対して、ずしりと重い責任を感じてほしいと願います。**（若井克子・栃木・四〇代）**

◆自分が改名するのなら、良い。親がつける名前としては、もし自分がつけられたらと考えると、困る。

（松本のりこ・神奈川・四〇代）

☆この国で暮らしてゆこうとすると、さまざまなサービスを受けるのに、いろいろな手続きが、この国では必要なのだということを考えました。**（山本謙吉・兵庫・二九歳）**

◇自治体が意見するのは、まちがっていると思う。この命名が言語による暴力だとも思えない。漢字の好みは、良いか悪いかわからないが、音のひびきは、とてもかわいい。

（山下祐子・京都・三〇代）

◇親の自由ではあるが、将来、子どもの意志によって改名できるチャンスがあれば、変えることも子どもの自由である。

将来「差別を受けるだろうから」という言い方は、おかしいと思う。差別というのは、「する側」が悪いのであって、差別される方に悪いところはないと思う。

（山田美智子・千葉）

◆確かに一般常識から外れた名前ではあると思う。役所に拒否する権利があるのかということが、ハッキリしないまま終わってしまったのが残念。

フランスなどでは少し前まで、聖人の名前をつけなければいけなかったらしいし、日本のみではなく外国で、命名はどのように行われているか調べるのもおもしろいかも。

（森上茂登子・埼玉・二〇代）

◇名を選んだ親（父）の思い入れがある事ですから、すんなり届け出出来て当り前と思いました。遊び半分で我が子に名をつける人はいないのでは。

もの心ついて本人が、その名を呼ばれるのがとてもいやであれば、別の呼び名を作ればよいのだし、親のつけた名を生涯使わなかった作家もありましたね。それも本人の自由だと思います。

（梨花美代子・岐阜・七〇代）

☆私じしんは、とくに自分の名まえが気に入らないこともなかったのですが、机上の空論屋だったもので、子どもの方としては、あるていどの年令になったら、名まえを再考する機会があってもいいんじゃないかと思っていたことがあります。

役所の対応については、線引きのしづらいことを、どうしてそう区切りたがるのかという感想です。**（L・大阪・女・二〇代）**

☆親はよくても子供はめいわくだろうと思うので、私ならつけないが、少なくとも、行政がこれを拒否する権利はないと思う。

（Y・S香川・女・三〇代）

◆名前は自由であっても、その子どもの将来を考えて、ふさわしい名前にするべき。

（S・I・兵庫・女・五〇代）

◇届けを受け付けた窓口の係の人が「お役所仕事」的にスンナリ受理していたら、マスコミを騒がす大問題にならなかったのではないか。悪魔ちゃんの両親も、世間のうるささに閉口しただろう。

どんな名前であろうと、個人的な問題ですヨ。「魔子」という芸能人や、アナーキストの子供もいましたね。

（中村あつ子・長野・四〇代）

◆親が勝手に子供の名前を決めてしまうことに、常日ごろ疑問を持っていた。ある程度の年令が来たら、自分で名前をつけ替えれたらいいのにと思う。という意味で、責任を持てないのならつけるナ！と言いたい。もちろん、他人が干渉することではないが。

（香川恭子・広島・三〇代）

◆名前をつけるのは親の特権。それだけに責任があると思う。子供が一生不利益にならない名前が良いと思う。

自由かもしれないが、親の越権ではないでしょうか。はっきり言って、私はきらいな名前です。（好みの問題ではありませんが）

（脇美智子・埼玉・四〇代）

☆名前には問題はないと思いますが、両親が「自分の子供だから」と言うところに、少しひっかかりました。私は、この世に生まれた子（人）は一人の人間として見てほしいと思ったのです。親の所有物ではないのでは、と思いました。

（道上広子・大阪・二〇代）

◇今までだって、すごい名前はいっぱいあったと思う。今ごろになってこんなことが話題になるのは、時代がそうなってきたのかなと思う。

いろんな細かいことに、いちいちチェックがはいる時代。本質的なものが見えにくい時代のできごとかな。

（南野忠晴・大阪・三〇代）

◎続きはもちろん号外で！

◆アクティブ・バース、水中出産があるのを知りびっくり。私の時は、安産のためには、ゆったりした心持ちで、体をよく動かすことしかなかった。私一人でなんとかしなければと、思い詰めていた。だから、片桐さんの「赤ちゃんがお母さんから“おめでとう”って言われる」には、そんな余裕がなかった私には、ううっと堪えてしまった。頑張ったのは私で、赤ん坊も頑張ってたんだっていう実感は、持てなかった。でもお互いに力を出し合って、やれたことだったんだね。（有坂）

●『ブラジルから来た少年』という映画はヒットラーのクローンを作るという話で、その夜はなかなか寝つけないほど不気味だったが、受精卵の中の母親の遺伝子を取り除くことで比較的簡単だというクローンの説明も、所詮、映画の中の話と思っていた。「使い方さえ間違わなければ」と、どこまでも進む科学技術。「新しい価値観、新しい人間観」を支える人間の「良識」ほど恐ろしいものはないと思う。などと言いながら昨日は子どもとザリガニ釣りに興じていた私です。（中村）

♣何を隠そう、この私も13年前マタニティスイミングに通いラマーズ法を噛ったはしり。家で助産婦さんを頼んでお産したいと言ったら、「頼むから普通にやってくれ、普通に」と夫に言われて折れてしまった日和見主義者。まともに産んだのはその子だけで、上下は帝王切開。3番目は痛い思いをさんざんさせられて、生まれた時は顔も見たくなかった。その子が今では無条件に一番可愛い。産むのも大事だけど、その後もあるからね。でも、お産は確かに最高に面白い。（河村）

★女の人の生き方の選択の幅が広がり、多様な生き方が可能になった反面、選ぶ（他の選択肢を断念する）というしんどさが浮上してきたように思います。

一昔前、英国に住んでいたとき、何でもいちいち選らばされ意志確認されるのに参ったのですが、彼らはそうやって選ぶ訓練を重ねて生きることで、何かを切り捨てなければならない、選んだ以上は引き受けていくという潔さを体得してきたのかもしれないと、今にして思うのです。これは私たちの次の課題？（稲邑）

☆いよいよ夏のフォーラムです。全体会はアナーキズムと家族、分科会は…新興宗教ブームと女の「現在」、草木染め、性教育、ＮＰＯ、からだの声を聞く、男性学、蔦森樹さんや森冬実さんのワークショップ、血縁・国籍に頼らない家族、民族共生を考える、オイリュトミー、H.I.V 感染者として、など盛り沢山。子ども活動も充実しています。8/6～7、箱根でお会いしましょう。5、6月号に挟み込みのパンフレットで今すぐお申し込みを。（実行委員会）

└またまたしつこく、購読者獲得のためのお願いです。お友達やお知り合いをご紹介下さい。見本誌をお送りします。学校や図書館にもご推薦下さい。また、都内近県で『Ｗｅ』を紹介・販売できそうな講演会や会合がありましたらお知らせ下さい。駆けつけます。└8月号の発送は8月12日を予定しています。その前の1週間は発送のための準備で大忙しです。チラシの印刷や折り込み作業を手伝ってくださる方があると助かります。お手伝い戴ける方はご連絡下さい。（編集室）

くらしと教育をつなぐ―Ｗｅ
Vol.3 No.4　1994年7月15日発行
定価600円（本体583円）
年間購読料／定価6800円（送料共）
〒225 神奈川県横浜市緑区市が尾町1161-8
共学舎内 ☎・FAX 045(974)3101
郵便振替 東京3-754314 ＷＥ編集室
三菱銀行 大久保支店 普0264724
発行／Ｗｅの会　編集／稲邑恭子　河村ふみ　中村泰子　印刷／(有)イー・エム・ピー　千代田区飯田橋2 5 2

有斐閣 新刊案内 (定価は税込み)
東京・神田・神保町2 Tel:03-3265-6811

若い女性の法律ガイド

トラブルが生じたときの
サバイバルブック

元気に生きていくための
法律の花束

ヤングレディを応援する

ハートのあるパワフルな弁護士
大谷恭子＋福島瑞穂 著
弁護士 国際的にも活躍 元気いっぱい

— Contents —
1 親とトラブる
2 学校でトラブる
3 男とトラブる：交際編
4 男とトラブる：結婚編
5 会社でトラブる
6 育ててトラブる
7 遊んでトラブる
8 買ってトラブる
9 借りてトラブる
10 からだでトラブる
11 すれすれでトラブる
12 警察とトラブる

四六判カバー付
定価1,545円

●家族を考える"話題の本"

21世紀家族へ

落合恵美子著

◉家族の戦後体制の見かた・超えかた
大学での講義をもとに書き下ろされたフレッシュなライブ感覚にあふれる家族論。「家族の戦後体制」という新しいキイワードを提示し、内容の検証、変容のさまを明らかにした刺激的な一冊！

定価一六四八円 (有斐閣選書)

家族は変わったか

有地亨著

家族に何を求めるか。家族とはなにか——家族をめぐる価値観は多岐に分かれ、時には深刻な葛藤を生む。家族法研究者の著者が、新聞・雑誌の投稿から生活に根ざす声をくみあげ、今までの家族論を検証しながら、家族および家族論の軌跡を追う。

定価二〇六〇円 (有斐閣選書)

東海大学出版会

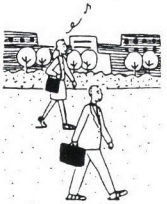
〒151 東京都渋谷区富ケ谷2-28-4
☎03(5478)0891 〈定価は税込〉

アメリカン・ダイエット

ウェルネスのためのダイエット・プログラム

H・L・N・アンダーソン著 鈴木正弘監訳 1236円

自分の意志と努力で心身の状態をより健康により幸福に保つことを、ウェルネスと言う。健康的な生活習慣を実行することにより、やせる、ストレスが減る、ウェルネスを増進させるといったことを目標に、8日間サイクルでスリムな体と健康を取り戻すためのガイドブック。



ヘルシーディナー

東海大学校会館編 五島雄一郎監修

フランス料理をおいしく食べて成人病を予防する。カロリー、塩分、コレステロール値と家庭で簡単にできるレシピつき。 1442円

ビタミンの話

勝沼恒彦・津田道雄共著

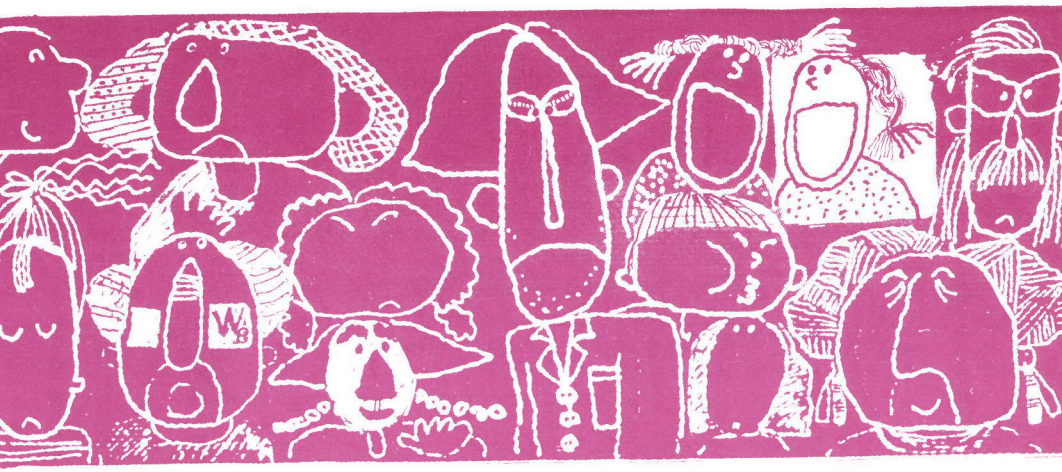
ビタミン不足にならないための食事学、ビタミンとがんなど、ビタミンの重要性について具体的に述べる。 1030円

スキンケアのすすめ

—美しい肌と健康な皮膚のために—

小澤明著

マッサージや化粧もやり方を間違うと逆効果である。本書は生きている肌の基礎知識をやさしく紹介する。 1030円



くらしと教育をつなぐＷｅ　1994年7月15日発行　第3巻第4号
定価６００円（本体５８３円　年間購読６８００円送料共）
郵便振替　東京３－７５４３１４　ＷＥ編集室